ユ2P36

95
45

司馬溫公言行錄

北畠竹之助編著

司馬温公言行錄

東京　内外出版協會

明治
41 5 29
内交

司馬溫公稿成因賦長句易題言

已拔幼時眞相量　咄嗟機警意攸揚
破瓶氣象斯民命　編史精神維典章
四聖鹽梅資啓沃　一身儀表率周行
千年尙友誰無感　燈火更闌眼欲光

著者識

目次

		頁
一	尙友	一
二	君實の幼時	八
三	公の學問	二六
四	優仕	三七
五	直言と明鑑	四九
六	新法	七一
七	安石と司馬溫公	八一
八	司馬溫公と資治通鑑	九四
九	公の筆法は謹嚴なり	一〇二

十　公の著述及び其の家庭……一〇七
十一　公は忠臣にあらず良臣なり……一一三
十二　公は明哲身を保つものなり……一一七
十三　公の詩文と其の性靈……一二三
十四　公の生活は最淡泊なり……一二九
十五　司馬溫公と蘇東坡……一三一

司馬溫公言行錄

其一　尙友

千歲の下に生れ、千歲の人士を友とす、倉心默契の間、自ら其の人に親炙私淑するの感想あり、此の以心傳心的の感想は、是れ取りも直さず、不知不識の間、向上の精神を鼓舞し、自己の修養に資し、自己の人格を高尙ならしむる上に於ける、一大導師ならずんはあらず、一大模範ならずんはあらず、是の故に、古來の聖賢と謠はれしもの、廣く天下の善士に交るを以て、唯一自己造詣の一大師資となせり、猶ほ此の一大師資を得るを以て自ら足れりとなさず、深く其の書に論及し、更に其の人を知らんと

とに是れ力む。讀書尙友の要、是に於て乎起る。讀書尙友のことは、百歲千歲を曠くして、爲めに相感發し、自己を激勵するものある也、自己を感化するものある也、自己を鞭撻するものある也、自己を督責するものある也。反省、思辨、勉學、審問、察識、凡そ自己修養に於けるの妙諦、動機は、皆這般の中に胚胎せざるは莫し。靑衿の士、豫め此の妙諦と動機とを了悟し造次顚沛にも、思ひを玆に致すにあらざるよりは、向上の工夫は、皆無也。修養は駄目也、聖賢又出づるも、決して我言を易へざるべし。

言ふ勿れ、其の人と骨と皆已に死し且つ朽ちたり、餘す所のものは、其れ只言のみ。其言たるや、盡く是れ反古の陳言、辭令の糟粕のみ、陳言糟粕何ぞ以て後世を激勵し、後學を感化するに足らん。是れをしも、猶ほ其れ足れりとなすものは、是れ古に阿ねる、迂夫腐儒の見のみと。

是れ徒らに自分自身其の物が、前經に瞎く、其の無學を掩はんと欲し、

漫に古哲を歷詆罵倒し、反つて自己自身の無學と無意識とを自白表明し、蛙子は口からの、醜態を演ずるものならずんばあらず。是等の徒にこそ、尙友讀書は、好個對症の良藥石たれ、最良國手たれ。

謂はずや、小人の澤は、五世にして斬つ、君子の澤は、十世にして斬つと。

小人とは、常人なり、常人固より、言行の記述すべきものなし、豈亦感化的作用を後人に與ふるの力あらん乎。然れども、其の生前行爲の事は、其の流風、其の餘韻の以て、感化五世の久しきに及ぶものあり、猶ほ其れ其の人を追想するに足る。

君子の行事、君子の言辭、其の嘉言と、其の善行は、其の擧動、其の容儀、其の云爲、其の談說、片言微辭と雖も、盡く是れ、格言眞戒として、九鼎大呂よりも重からしむ。其の人や死し、其の骨や朽され、其の書や、故紙廢物たるを、免れずと雖も、其の理想と、其の氣韻は、千古萬世に亙り、永劫未來に通

じて儼存し、敢て其の形骸の腐朽と存在との如何に關係する所のものあらざるなり。久遠に亙れば、久遠に亙る丈け、其れ丈け、益々其の光明は發揮せらるゝなり。益々其の理想は闡明せらるゝなり、益々其の行爲は顯著ならんとするなり。所謂江河萬古長の鐵案は、是に於てか下さるゝも、決して其の誣言にあらざるを信ずるなり。

思潮は、常に時代と變遷せり、移轉せり。精神界の時代あり、形骸的の時代あり。精神界の時代には文學界に、思想界に、幾多の聖哲、幾多の偉人傑士を輩出し、形骸的の時代には、物質奇巧の末に馳せ、學問向上の事、亦更に問ふを要せず。世風謠俗、爲めに無味乾燥、滔々たる天下、盡く是れ功利に向ふが如きの結果は、是れ古今東西、歷史の證據立てたる所也。前者は則ち是れ形而上的にして、後者は則ち是れ形而下的也。形而上的傾向の時代は、道統一系の光明を認め得るも、形而下的傾向の時代は、功利競熱

の渦中、道義の眞光は、爲めに埋沒せられ、人心萎靡腐敗の絶頂ならざる可からず。

時代の思潮は、其の國民品性の高下を卜知するに於て、尤も好適なる著龜たるを失はず。是を以て觀光の士は、先づ第一に眼を此の點に注がざるを得ざるなり。

歷史は繰り返すものなりとの言は、寔に耳にするさへ、陳套を感ずるの嫌あれど、社會の實相は未だ常に此の範圍を脫する能はざるなり。社會の光景は、幾度と言ふことなく、常に此の範圍に於て繰り返され宛として走馬燈籠の如く、然るものある也。此の間に生息せる所の各々のものは、斯の一種の燈籠を追うて廻はるの一個の幻影なりと言ふも、敢て不可なる所なし。唯一大偉人にして、能く此の燈影の外に卓立し、安心立命の地位を獲得するを見る。此の偉人こそ、時の前後に論なく、尙友の標

的、感化の謨訓たらざる可からず。此の偉人は常に儼存せり。冊子を繙けば、沈思默契の問、吾人の目前に髣髴たるものあるを認めずんばあらず。詩に所謂、唐棣之華、偏而其反、書に曰へる、思茲在茲、の微言は、方さに是れこれが妙諦活機を暗示せるの門戸と謂はざる可からず。聖賢の微言敢て門戸の閉塞を欲するものにあらず、これが開放を拒絶するの理なし。鑰鍵は、吾人の手にある也。吾人の手を以て之を開く、誰か亦之を咎むるものぞ。

眼を轉じて、今日の思潮如何と見よ、今日の趨勢如何に徵せよ。西歐文明東漸の結果、精神界に非常なる影響を與へ、物質的の進歩と共に、其の思潮は、日に月に向下し、更に向上の傾向なく、人は唯だ形而下渦中に狂奔し、人心萎靡腐敗の極、殆ど其の底止する所を知らざらんとす、是れ寔に寒心すべき光景ならざる可らず。

凡そ、物其の窮極する所に至れば、則ち反る。彼の歷史其の物が、繰り返すてふ、陳言も、全く此の原則に支配さるゝに外ならざるべし。社會の思潮が、是の如く形體的傾向に馳せたる結果は、幾時日迄も、此の傾向が持續さるゝものにあらず、早晩此の傾向は、一轉再轉、精神界思潮を聯想せんとするの自然傾向を現出せずんばあらず。此の聯想は、方に是れ思潮變遷の過渡期なり。

如上の過渡期に於ける、聯想は、自然に古人に聯想する意思の發顯を抑止せんと欲して能はざるなり。是に於て乎、讀書尙友の事起るなり。

吾人が最も敬愛せる所の、天下幾多の青衿諸子よ、吾人と感を同じくせる所の同好諸卿よ。吾人は卿等と共に、天下の最大樂事たる、讀書尙友の賞心快事を共に分たんとするの好機會に遭逢したるものあるを喜ぶ也。天涯地角、假令ひ江湖地を隔て、山水處を異にするものありと雖も、

三寸不律の妙用は、以て對座握手、茶を喫し、爐灰を畫し歡語するに異ならず、其れ亦快事中の一大快事ならずとせん乎。

尙友の主人公とは誰ぞ。宋代の偉人、端明殿學士、兼翰林侍讀學士、太中大夫、提舉西京嵩山崇福宮、上柱國、河內郡開國公、食邑二千六百戶、食實封一千戶司馬光其の人なり。

吾人は此の宋代の偉人を拉し來り、吾人が敬愛せる同好の諸卿と共に、其の言行に親炙し、精神界思潮の傾向と相待ちて、向上修養の工夫に資する所のものあらんとす。若し其れ吾人庸陋の筆、此の偉人の髣髴を寫し得たらんには、君實の英靈、地下に於て一笑せん乎。

其二　君實の幼時

膠に、梅檀は嫩葉より香ばし、と謂へることあり、偉人傑士の生出は、必ず凡人と異なるものなくんばあらず。詩には、維嶽神降の說あり、書には異畝同穎の瑞を示せり。巨人の足跡、斗樞の傳說、時に或は好事者の藉口に過ぎざるの嫌ありと雖も、抑〻亦其の謂はれなきにあらざるものあり。其の逝いて爲すある底のもの、其の生出の當時に於て、由來する所のものあるは、是れ亦理數の當然なりと謂はざる可からず。吾人は斯かる偉人生出の由來に觀る每に、斯かる傳說を以て、神異誣妄の談に委し去るを得ざるなり。

偉人と呼ばれ、傑士と稱せらるゝ所のもの、假令ひ、其の生出の當時に於て、非常の事ありしを認めざるにせよ、其の生立に於て、必ず一種の異采を放つものなくんばあらず。詩に岐嶷の字を以て詠歌せしも、生立當時の異采煥發を頌せしの辭令に外ならざる也、蛇は寸にして牛を嚙むの概あるもの、決して偶然にあらず。

項羯は七歳にして孔子の師となれりと傳ふ。孟軻は三遷の幼時に於て業に已に、希天希聖の抱負を懷けり。俎豆禮容の遊戯は、則ち是れ異日大聖師表たるの素質たるを失はず。孫叔敖が兩頭の蛇を殺したる、一片仁俠的小兒心は、則ち是れ異日楚國に宰相たるの先天的稟賦なりと謂ふも、決して過言にあらず。生知安行の大聖に至りては、言ふも更なり、其の之に次ぐものと雖も、其の幼時に於て、卓然群に拔くものなくんばあらず。其の言動、業に已に人の意表に出づるものなくんばあらず。

宋代の大偉人、大立物、眞宰相、大著述者、大德望家たる、司馬溫公は果して何れの地に生まれたる乎。公の出生を記述せる所の傳記は、明かに吾人に敎へたり、曰く、陝州と。

嗚呼、陝州乎、陝州乎。陝州に就きて、聊か吾人をして語る所あらしめよ。試みに、輿地圖を開きて見よ。陝州は今の河南省に屬せり、古の所謂陝東西なり。陝東西の地は、支那歴史上に於て、果して如何の關係を有する乎。支那歴史の上に於て、最も光耀ある頁を有するものたるを失はず。

天の曆數を以て之を推すに、周室、王を累ぬること三十有五、年を經る八百餘歳、之を皇朝一系連綿たるに、比較せんには、固より物の數にも足らざれども、由來支那帝國の常として、一仆一起、年代尤も促し。宛として奕棊變移の狀態の中に於て、之を論ぜんには、實に比較的多くの年歳を贏し得たるものと謂はざる可かず。其の間、尤も周室全盛の時代とも謂ふべきは、成康宣の時代にして、康宣の時代は、且らく措きて之を論ぜず、殊に成王の時代の如きは、成王假令ひ、幼にして政治を執るに足らずとするも、周公、叔父の親を以てし、攝政の位に居り、專ら忠厚仁慈の心を以て成王を輔佐し、召公奭と共に左右の人となり、陝より以西は召公之を主どり、陝より以東は、周公之を主どり、刑罰は措いて用ゐず、後世治を言

ふもの、皆此時を頃するに至らしめたり。周室衰微、列國七雄の割據の時代に見るも、此の東西の關鑰は關を界に一つの區劃をなし、天下分け目の一大要地となりたる、蓋し亦疑を容れず。劉項の紛爭前、秦氏は西雍州の地を占め、關を以て境となし、長安に鼎を定め、六合を併呑して、支那封建の制度を打破し、郡縣の制に改め、支那政治の上に於て、一大革命の事を擧げたり。其の運祚、寔に長からずとするも、秦氏が能く茲の大革命の實績を擧げたる所以のものは、抑、亦形勢の雄なるものに據りしに外ならざるなり。

劉氏一呼、秦に勝ち、項を亡ぼし、都を東都洛陽に定め、大風起兮雲飛揚の歌を謠ひたるは、如何に其の得意を示せしぞ。其の後、辯士婁敬が、輅を委して以て、長安遷都の議を提供し、漢高の人言を容るゝに吝ならざる、天下を擧げて一朝之に移り、漢家四百年の泰平を開きたる、亦以て稱道するに足るものあり。王莽の簒位は、一朝槿花の夢のみ、劉秀、帝室の裔を以て春陵に幟起し、僭亂を討平し、鼎を東都に奠め、天下の諸豪皆之に風靡せり。明帝の長安遠近論は、以て幼時當意即妙の機警を察知するに足る。左思兩都の賦は、如何に偉麗に、雄大に、爲めに洛陽の紙價を高からしめしもの幾許ぞ。諸葛亮が劉備の知遇に感激し、漢室を再造せんことに盡瘁したるも、一に是れ、都を舊都、乃ち洛陽に還さんとするにあり。李の洛陽名園記には、洛陽の盛衰は天下治亂の候なりと唱破せり。洛は是れ天下士人の麕集する所、曾ては士太夫の冀北を以て目せられ、由來支那帝國河南に於ける、東西兩都は、支那の中心點にして、人文の發達、諸豪の生出も、多く是れ東西の間に於てせしや疑を容れざる所ならずんばあらざるなり。

形勢の人物と相干聯するは今更に喋々を要せざる所、東西二都の形

勝名邑にして、支那帝國中、殊に光輝あるの歴史を有すること、已に彼が如しとすれば、偉人の出づる寔に偶然にあらざるを知るなり。

司馬溫公其の人も、最も由緒ある陝州の地に生れたり。陝州と、公とは、歴史上の由來よりして推す、實にさることなるべし。いてや、公の幼時に就き、說く所あらん乎。

偉人は、其の幼時に於て、已に異采煥發のものあるを說けり。今且らく、偉人の幼時に於ける一二の類例を擧げしめよ、敢て其の重複を咎むることなかれ。

陸象山は、宋の大儒なり。彼は、其の童丱なる時に於て、曾て其の父兄に問ふに、所謂宇宙なる二字を以てせり。已にして忽ち頓悟して曰く、宇宙分內之事、我之所當盡と。是れに由りて以て自己の見地を定め、遂に一家をなすに至れり。朱熹は、七歳にして善く孝經の大義に通じたりと傳ふ。

幼時已に群に拔くもの、往々にして足らざるなり。

公が一日遊戲の時に於て、甕を破りたるの一事は、最も是れ人口に膾炙せるの一大美談たり。公が異日、ずゝの大宰相として、眞宰相として、仁宗、英宗、神宗、哲宗の四朝に歷事し、啓沃獻替、天下の重望を其の一身に背負ひ、兒童走卒も、猶ほ善く、司馬君實を知り、公不出奈蒼生何の概ありしものは、全く其の資質其の素因、幼時破甕の當時に於て、業に已に其の胚胎を見るものなくんばあらず。孫叔敖殺蛇の事、假令ひ其の器は、溫公に比して、小なりとするも、世の相去る、幾千年、地の相去る、千有餘里も曾ならず。古昔非常人の所爲は、其の幼時に於て、殆んど符節を合するものあるなり。

菽麥梨粟を辨ぜざるの時代にして、已に此の仁惠的動機の發芽を見ること、是の如し。此の動機は、是れ決して他の强制に待つあるにあらず、

所謂、然るを期せずして然るの妙機に屬す。疾痛慘憺惻隱の心も、此の動機に外ならず。孟軻氏の不忍の妙契も、一に乃ち是れなり。

卒然の變は、大人と雖も、猶ほ時に顧慮狼狽、失措倉皇の狂態なき能はざるなり。一兒の甕中に溺るゝもの、寔に是れ卒然の變と謂はざる可からざるなり。然るに此の間に處し、敢て倉皇失措の愚をなさず、咄嗟の間、善くも破甕の機警に出てたるは、小兒とはいへ、其の胸中の綽々たる、眼に全甕なく、胸に十全の成竹を貯へたる、應變活潑、人をして後に瞠若たらしむるものなくんばあらず。變通の材、豈に吾人の說明を待ちて之を知ん乎。

機警頓智は、時に至誠平易と相矛盾するものなしとなさず。陽明子が梟を懷中にして爲めに其の繼母を戒めたるが如きは、妙は誠に妙なりと雖も、假令ひ一時の權宜に出てたりとはいへ、術數の嫌なき能はず。陽

hatchet
ape

明子は猶ほ可なり、後來陽明子の皮膚を學ぶの徒、往々醇なる能はざるものあるは、蓋し亦免る能はざるの理勢たり。

其の人や、至誠純粹、些の渣滓なし。是れ殆んど先天性のものに屬せん。此の人にして一旦卒然の變に遇ふ時は、從容不迫の中に於て、臨機の處置をなし、而も其の跡を拔せん乎、毫も術數的のものたらず。此の一事、以て公の人品性格が、如何に碧巖の頃よりして、一頭地を拔きしかを知了するに難からじ。

公の一生を評せん乎、一言にして之を蔽ふべし。菡經三百五篇、其の言辭は寔に多し、夫子は一言以て、之を蔽ひたり、曰く、思無邪と。

公の一生は、寔に是れ、身は四朝に歷事し、最も是れ多事多虞の時なりし也。最も是れ複雜極まるの時なりし也。然り、天下は多事多虞の時なりし、複雜更に複雜なるの頃なりし。而して公は、唯只從容優樂、至誠を以て、

善く此の間に處したり。眞宰相の面目、豈其れ聲音笑貌の能く爲す所ならん乎。

公の徑路は、實に複雜なり。而も公は、一貫主義なり、公は至誠を以て一貫せり。未だ至誠にして動かざるものはあらず。至誠の發する所、鬼神をも感ぜしむべし、豚魚をも頷せしむべし、頑石も點頭せしむべし。蒼生の額手、亦何かあらん。然り、公が至誠の由來する所、果して如何。

公の逸事を載せたる邵氏後錄は明かに、公の幼時を吾人に紹介せり。曰く、

光年五六歲なるとき、青胡桃を弄せり。女兄爲めに其の皮を脫せんと欲して得ず。女兄去る。一婢子湯を以て之を脫す。女兄復た來りて、胡桃皮を脫するものの誰たるを問ふ。光曰く、自ら脫せりと。先公適々見て之を詞して曰く、小子何ぞ譫語を得る。光、是れより敢て譫語せず。

天資已に純潔、而して內に嚴父ある此の如し。家敎の嚴格なるは、日常の間、一擧一動の微に至るまで、決して之を忽諸に附することを爲さず、遂に克く公の盛德大業を大成せり。幼時胡桃脫皮の一事、是れ公が畢生大偉人たりしの根柢なり、骨子なり。

劉安世、嘗て公に問ふに、己を行ふの要を以てす。公之に答ふるの言に曰く、

我れ材性の人に過ぐるものあらず、唯人に對して言ふ可からざるものなきのみ。劉更に其の要を問ふ。唯答ふるに至誠の二字を以てせり。劉更に其の由る所を請ひ問ひたるに、忘語せざるより始まるの一語を以てせり。

道は邇きにあり、而して之を遠きに求むるは、是れ即ち學者の通患な

り。聖人の言は、帶より下らざるなり。公が劉に答ふるの言は、如何に簡にして其の要を得たるぞ。公が畢生の進路は、只此の二字を以て、徹頭徹尾、終始一貫せり。而して此の一貫主義は、全く幼時に於て、天資純潔なる上に、家庭の嚴格を以て、之を訓練せり。既に順良なる子に、加ふるに嚴父を以てす、寧ろ羨望すべきの一事ならずとせんや。

已に七歲にして、春秋左氏の大義に通じたりと言ひ、五六歲の時、胡桃の微事、深く戒語を戒めたるが如き、大學の謂ゆる、勿自欺之、子思の誠も皆此の一事に包含せらる。他日の大成も亦茲に於て期すべきなり。

若し夫れ、公が破甕の事に見て、天才なりと速斷する所のものあらんには、乃ち大に誤まりたるの見解なりと謂はざるを得ず。材には美惡あり、公が此の間に於ける妙機の發動は、材以前に於ける自然性の發動ならざる可からず。自然性の發動なればこそ、更に一點の强制的行動を見ざるなり。

七歲春秋の大義に通ずるを得たるは、即ち是れ眞の天材たるなり。理を以て、之を言ふ、性本惡なし、性惡なければ、材亦惡なきは、是れ理の自然なり。是れ即ち聖人の徒たるなり。性已に或る物に陷溺す、是に於て乎、材亦惡ならざるを得ず。是れ中人の性然りとなす。公の材性は、中の上の品に在り、此の間、加ふ可からず、亦損ず可からざるなり。

公は生れて業に已に、此の材性を具備せり。而して之に積むに歲月を以てし、存養省察、遂に其の德を完成せり。

吾人は如上の論說に於て、公が幼時の一斑を略ぼ盡せりと思料せり。更に少しく方面を轉じて、論評を試みんと欲するものあるなり。

吾人は尙友の項に於て、已に言へりし如く古人に親炙して、己れ進修の資となすは、是れ、讀書の快事たり、否、快事たるのみならず、若し左せざ

らんには、日に數十葉の書を讀み、年に數十卷の書を誦するも、果して何の益ぞ。吾人は公の言行を記述するに於ても、再び之を繰り返すの煩を厭ふ能はざるなり。

世の偉人を論ずるもの、多くは、其の結果に見て、其の主因を見ることを爲さず。其の成功に見て、其の成功の由來に就きて、尋思することを爲さざるなり。殊に青年有爲の輩は、功名心に驅られ、空想に耽るの反動よりして、此の弊竇に陷るもの往々にして足らず。

今其の一例を擧げんか、舜は大聖人なり、彼が側陋より起り、堯に代りて、天下の事を攝行せるに於けるの績に就きては、皆是れ稱道至らざる莫し。而して彼が側陋當時に於ける耕稼陶漁の至孝德行に至りては、之を忽諸に附するやの感想なき能はざるなり。

耕稼陶漁の時代に於ける、至孝德行の實は、即ち是れ彼が、異日成功の

攝位を孕み出せしの根本骨子たるなり。根本骨子を外にして、唯其構造と、其皮膚とを擧ばんと欲す、宛かも矢栝のはずれたるに氣付かずして、而して、矢を放つが如し。矢は乃ち、手下に墮落するの愚を見て止まんのみ。道に志すもの、此の愚を演するとせんか、一歩も進むこと能はざるべし。

溫公に見る亦然り、溫公を讀書短檠の下に呼び起し、溫公と面談せんか、話頭は果して先づ何れの處より始むべきか彼が四朝の知遇を受けし上よりせんか、彼が仕官の最初に於てせんか、彼が諫院に入りしの當時に於てせんか、彼が新法を拒みし侃々の議を反復せんか、彼が安石惠卿を論ぜし眞面目を拉し來らんか、彼が畢生の大著述たる資治通鑑編纂の事を繰り返さんか、彼が五害を上疏せし事を問はんか、曰く、これ皆末なり、公と大に面談せんと欲するものは、必ず先づ第一に、公が幼時に

於ける破甕胡桃の二事に想及せざるを得ざるなり。

兵法の第一要義に曰へり、敵を知り、己を知るは、是れ兵家の第一要義なり。古人を尚友とし、自己の進修に資せんとする物、亦必ず此の兵家の要義を知らざる可からず。溫公を知らんと欲するもの、先づ第一に自己を知らざる可からず。自己を知りたる後、溫公の夙生英達は、之を學び得るものなるか、將た否かを研究すべし。卿等は、之を研究したるの結果、若し其れ學び能はずとなすか、此れ儒夫の所爲なりと謂はざるか可からず。聖賢の訓辭は、堯舜亦人と同じきの微言を以てせり。人至らざるなきの勇氣は、即ち是れ、進修成德の徑路なり、活機なり。此の徑路を善く悟了したる後に於て、讀書尚友、之に次ぐに、歲月練磨を以てせば、古聖賢も、決して及び難からざるべし。溫公に於ても、亦何か有らん。斷じて之を行へば、鬼神も之を避くるの概あり。遐往如何と顧みる而已。

溫公と少時、吾人と溫公、均しく是れ人なり。溫公も曾て、竹馬に跨れり、曾て、紙鳶を飛ばしたり、性相近く、習相遠きの逕庭も、一に此の間に於て存せり。一龍一豬の懸隔も、專ら平生の行動如何に職由せざる可からず。別に韓愈の勸學文を繰返すが如き煩をなすにも及ばざるべし。唯其れ上智下愚を移らずと謂ふが如きは、殊に其の極端を示せしものに過ぎず、あるは、希天、或は希聖、或は希賢、其の人稟賦の性分と、修養省察と、力を用うるの厚薄に由り、遣詣する所のものあるは、決して疑を容れざる所なり。

深夜、人靜まり、一穗の寒燈、轉た烟々たるの下、古人を拉し來り、平旦、晝時、夜分、自己が行動し來りたるの云爲と、對照參較、反省自警するものあらんには、千萬歲已上の人と雖も、必ず其の眼前に、躍然として迫り來るの概あり、以て自己を警醒し、自己を戒飭し、自己を奮興し、自己を敎導す

る物なくんばあらず。聖賢の事業、方冊にあり、倣ふべく、師とすべしと言へるも、是れなり。活眼と活書、讀み去り、讀み來りて、初めて活人の出現を見ることを得べし。文武も死せず、周公孔子も死せず、老も死せず、莊も死せず、將た又孟軻も死せず、ソクラテースも死せざるなり。幾多の活人は出現せん。端坐靜默の裡、幾多活人の出現と共に、此等の活人と相對して、提耳面命の教養を受く、謂ゆる左右前後盡く正人なり、其の身の正ならざるを欲して得ざるなり。

吾人は、溫公を紹介し、溫公の幼時を論述するに於て、特筆大書、以て卿等の注意を喚起し、書を誦せば、當に其の人を知るべきを勸告して止まざるなり。

其三　學問

易に天行健にして息まずと言ひ、書に降衷を言ひ、詩に懿德を言へり凡て詩書六藝に傳ふる所のもの、其の稱說する言辭は異なりとするも、其の歸着する要點は一なり。學問の道、只斯心あるのみ。聖賢の心も、衆庶の心も、敢て異なる所のものあるを見ず。聖人の經は、心經なり。心經自得の結果、克く古賢一轍に歸するを得るなり。

漢唐諸子、吾人は、且らく玆に之を說かざるべし。宋儒に至り、周茂叔、訓詁を外にし、一に心を以て主となし、天理に合するを以て學問の極致となし、性物の學を以て、一家學を揭建せしより、程朱に至りて、之を大成し、天人合一の說は、當時學者の尊信せし所のみならず、後世學者も、亦此の說を踏襲潤色するもの、多きに居るに過ぎず。而して性理の說は、學界に於て、一生面を開きたるの觀なきにあらざりし。

性理の說、其の弊の存する所のもの、學者が理に拘泥するの結果とし

て、兎角實行に疏なるの嫌なき能はず、天を樂しみ、命を知るの本領より
して、己一身を善くするに止まり、兼濟的抱負に乏しきに似たり。其の施
爲、多くは退嬰主義にして、進取的救世的ならず。故に個人としては、其の
德、一世を感化するものあり、後人の尊崇に値ひするものなきにあらず
とするも、天下兼濟的の反面より觀察を下さんには、別に記述すべきも
のなし。後世性理に拘泥するの結果は、世務的大人物を出だす能はずし
て止まんとす。

吾人は、聖人の書を讀み、聖人の道を心に求むるに於て、或は漢唐諸子
を稱し、或は宋儒を稱することの、甚だ恰當ならざるものなるを信ぜん
と欲す。

聖人の書を讀する、其の文字、其の言辭を稱すること、固より其の求な
るべきものにあらず。天才超凡なる所の蘇東坡は、唯其の意の向ふ所を見るのみと唱破せり。是れ方に學者の好指針ならざる可からず。吾人は聖賢を群に求めずして、之を意に求めんとす。意至る時、斯の心亦至るなり。獨會の心契、苦し亦此の外に出でざるべし。吾人は、單に漢唐諸子を稱し、宋儒を稱するの末に、偏狹の見なるを信ず。猶ほ亦此に由りて古道を求めんとするの、實に迂遠なるを信ず。猶ほ亦此に由りて古道なるのみ。道外、漢唐なし、宋儒なし。古言にも人善弘道、非道弘人と言へり。此に由りて推せば、聖人微言の存する所、知るべきのみ。

見地は、我に存す。時に他山の石、以て玉を攻むべきものなからずとするも、其は、一に我の取捨に任すべし。他人の見地に拘泥し、自己を忘却するに至るは、寔に危險千萬なることならずとせんや。

溫公、學問の見地は如何、公は理學將に勃興せんとするの時に遭逢せり、而して、公は超然此の間に卓立せり。敢て理學に拘

泥するの迂遠を演ぜざりしなり。

公は、其の幼時に於て、業に已に、破甕の當時、宰相的、兼濟的、大抱負の萌芽を眺せしが如く、公は終始此の見地を一貫せり。遂に此の萌芽を大成せり。公の學問は、實踐的なり、躬行的なり、直ちに、聖賢濟世の心を以て自己の本領となせり。斯の心古聖賢と同一なることを自覺せり、斯の心を以て自己の見地を立てたるなり、立脚點を確立したるなり。此の見地と、此の立脚點とを以て、畢生の大業を大成したるなり。

概括して之を謂はんか、古に學而優則仕、との言あり。公は百尺竿頭、猶此の言に一歩を進めたるものなり。

仕學兼長の四字は、即ち是れ公學問の見地なり、立場なり。

公は學ぶと云へる背面には、必ず仕へんと欲するの大志望を有せり。此の大志望は、講學の間、一日片時も其の念頭を離れざりしなり。仕を欲するの念慮は、決して斗升の祿を求めんとして然るにあらず。公は、一身の溫飽、天に愧づるの概を懷ける人なり。仕へて後、我が君を堯舜の如くになさんとするの大抱負を有するなり。先づ君心の非を格さんとするの大人たらんと欲するなり。公は夷由的人物にあらずして、伊尹的人物たるなり。狄人傑的人物たるなり。公が學問の見地は、適に當時の輩と其の選を異にせり。

致君堯舜豈無術、何人待我季孟間の十四字は、移して以て、公の人格を論定するの好鐵案と謂ふべし。公は、阜夔稷契を以て自ら居れり、否、自ら居れりしのみならず、公が四輩の間に立ち、黨類分派、同黨異伐の難關に處し、善く擁護調停の責を全くせしが如きは、方に是れ公學問の見地よりして修養し來りたる造詣ならざる可からず。

更に公が平生を記せるの書に曰へり。公、年十五にして、書として通

ぜざる所なし、文詞醇深にして西漢の風ありと。

又記せり曰く、

公幼時、記誦の人に如かざるを思ふ、群居して講習す、衆兄弟既に誦をなして游息す、公獨り帷を下し編を絶ち、能く諳誦するに迨びて乃ち止む。力を用ふること多き者は、功を收むること遠し、其の精誦する所、即ち終身忘れざるなり、公嘗て言ふ、書を讀む誦を成さずんばある可からず、或は馬上に在り、或は中夜寢ねられず、時に其の文を詠じ、其の義を思へば得る所多し矣と。

文詞醇深の字面、最も善く公の性格を描寫し盡せりと謂ふべし。言あるものは、必ずしも德あらず、德あるものは、必ず言あり、仁者の言は其の言講如たるものなり、文詞は、即ち是れ性行の寫眞なり、安石が文詞の執拗なる、東坡が文詞の洒脫なる、老泉の溫醇なる、朱子の着實にして

道學的なる、皆其の性格の一斑を寫して餘師あり、溫公の眞摯著實なる、其文詞が醇深なるは、固より疑はざる所、彼の漫に辭令の妙、措詞の奇に矜るが如きの輩と同日にして語る可からざるなり。

吾人は、前文に於て、公が幼時に於けるの天才に就きて、業に已に讀者に紹介せり、今茲に更に、記誦の人に如かざるものあるを言へり、其の論旨、殆んど前段と矛盾するの嫌なき能はず、是れ決して矛盾せず、理解力は、天才なり、諳誦背讀は別途の者たるなり理解せずして無意味の諳誦をなす等の如きは、頑童猶ほ時に之を善くすることを爲す、公が背誦に苦しむを以て、直に公材性の鈍きを疑ふが如きは、淺膚の言たるを免るゝ能はざるなり。

既に言ひしが如く、七歳にして、善く春秋の大義を理解したるが如きは、如何に其の材性の人に過ぐるものありけるぞ、業に此の如きの材

あり、猶ほ其の上に、誦をなさゞれば止まざるの大決心を以てし、猶ほ彌が上に、久々積むに歳月を以てす、大器晩成の實、些の疑を要せざるなり。

發憤、食を忘れ、樂んで以て患を忘るゝは、即ち是れ學者の覺悟ならざる可からず。已に其の義に通じ、其の辭を諳誦する底に至れば、聖賢の事業、盡く是れ我の所有たるなり。是に於てか、其の材性は、益々圓滿に、其の抱負は、愈々多大となる。古昔偉人が讀書問學に由りて、自己の人格を作造したるもの、皆此の造詣修養に待たざるは莫し、何ぞ獨り溫公のみならんや。

吾人は更に再言して、此の項を終らんとす。由來宋學の弊處は、彼等が强ひて佛教と其の論を頡頏上下せんと試みたるの結果、漫に高明に馳せたるの嫌あるに在り。彼等が、高明に馳するの餘弊は、自然に實利に遠ざかり、學者は唯故紙堆中に頭を沒するの外、亦能事あるを見ず、人の本

朝に立ちて、大に斯民を救濟せんとするの大發展、大發動を見ること能はず。

人の本朝に立ち、道を行ふを得ざれば、則ち退きて、之を其の徒に授け、或は之を其の書に筆して後世に傳ふるは、決して不可なし、先哲已に之をなせり、後輩之に紹ぐ、又何の不可かある、吾人敢て議するを欲せず。されども學問の餘弊、單に退嬰的に陷り、進んで他を利するの大素養と、大本領とを缺くに至りては、蓋し亦、先哲が後輩に期待する所以の意思にあらざるべきか。

公の烱眼は、早くも此の弊害を看破せり。公は讀書場裏に齷齪し、高明自ら售ふが如きを以て、學者の能事とはなさゞるなり。公の學問は、救世主義にして利他主義なり。而して畢生の間に於て、善く其の理想を實行したるの人なり。而して亦其の理想を後世に傳へたるの人なり。公は當

代の躬行的人物にして、亦後世垂範的の人物たるを失はず。公の如く、善く其の理想を實行し、將又善く理想を歷史的に傳へたるものは、支那歷史中に於て稀に見る底の人ならずんばあらず。

孔門仁を以て學問の本領となす。孔門子弟に敎ふ、提耳面命の要に見るに、必ず仁字を以てす。其の仁を言ふもの、一再にして足らざるなり。然れども、其の各子弟に眎す所のもの、仲弓に司馬牛に、子路に、樊遲に、僕を更ふるも猶ほ足らざるべし。而して此等の數子に說くに、仁を以てすと雖も、皆是れ、仁を爲すの法、仁に進むの徑路を以てせしに過ぎず、仁其の者の本體に至りては、未だ容易に說明するものあるを見ず、唯仁を問ひ、孔子が四勿の目を以てしたるは、顏子あるのみ。孔門の仁を以て至大至重、學問の本領骨子となしたるや、是の如し。然れども、吾人は言はんと欲す、仁の用は唯だ其れ利他に在り。仁、他を利するより大なるは莫しと。利他主義は、博愛主義なり、博愛主義は、兼濟主義なり。公の理想は善く此の主義を以て一貫したるなり。公問學の根柢や、其の由來する所、寔に深且つ遠なりと謂ふべし。文詞の如き、畢竟其の緖餘たるに過ぎず。學問の効も、其の事業、其の施爲と相奇ち、初めて活學問たるを得るなり、其の人も活偉人たるを得るなり。嗚呼、仁學兼長主義なる哉。吾人は、大に仕學兼長主義を鼓吹せざるを得ざるなり。仁學兼長主義の世に鼓吹せられ、世に實行さるゝの曉に於て、更に再び公の如き大偉人に接するを得ん乎。

其四　優仕

司馬遷は曰へり、嵒居奇士の行なく、貧賤にして仁義を語るは羞なりと。眞に然り。仁義を語るも、仁義の施爲なき、即ち是れ仁聲仁聞ありて、民其の澤を蒙らざるものと抑も何の擇ぶ所ぞ。士苟くも學ばざれば則ち

已む、苟くも學ばんか、必ず仕へざる可からず。必ず仕へて以て、斯民を利し、併せて昇平の慶福を共にするの覺悟と、勇氣となかる可からず。聖賢の微旨も、決して此に外ならず。

支那歷代の習俗因襲を按ずるに、士の道を抱くもの、其の抱負を行はんと欲せば、仕途を求むるより、又外に其の術なきなり。故に割烹の策も時に或は陋となさゞるものあり、叩角の歌も時に或は謠ふべし、鼎も負ふべし、蹻も踏むべし、自ら其の身を潔うせんことに齷齪して、寸毫も斯民に益する所なき、或は不可なしとするも、聖賢の微旨に合ふや、否やは疑問なり。

光武、戎行より起り、碎雍を興し、大に處士を優遇せしの結果は、嚴光の高節、一時漢代の史上を光燿せしものあり。其の餘韻風流は、延いて桓靈の末造にまで波及し、天下の學者は、一時民間に在り、朝廷の秕政を攻擊

し、東漢の末路、猶ほ能く、一條の光明を認め得たるものありとするも、若し其の當時、嚴光、處士の議に拘束せられず、奮然光武の請を快諾し、其の身は諫議太夫の一人として、面折廷爭、以て光武を輔佐したるものあらんには、東漢の斯民、早くも泰平の治を謳歌し、猶ほ一層光武の德を頌せしのみならず、其の氣習の及ぼす所のものは、續々嚴光的直言敢行の士を出だし、桓靈の當時、天下の學士は、草茅危言の、空論的徒輩たらずして朝廷の上に在り、直言敢行、躬行責の幾多大政事家を出だしたるやも、未だ知る可からざるなり。果して然らんには、桓靈の末路は、假令ひ狂瀾を既倒に廻すこと能はざるも、猶ほ確に命脈を維持して、彼が如き悲慘を呈せざりしも知る可からず。人は頻りに嚴光の志節を稱せり、光武の包含を頌せり、高節稱すべし、包含頌すべし、然れども、吾人を以て之を見んか、當時嚴光たるもの、寧ろ節を折りて、一諫議太夫を拜するに如かず。

光武已に嚴光の大節を亮とするの包含的大量あり、若し嚴光にして、一たび、其の節を屈し、時に投じ事に觸れ、侃々諤々の議を唱へて、殿陛の下に論爭せば、光武の包含洪量なる、其の議論を容るゝに吝ならざる、宛も是れ滔々汨々として、江河の水、大海に注ぐの概あらんなり、事體是の如くなりとすれば、嚴光たるもの、飽くまでも、尺を枉げて、以て尋を直くするの、途に出てざる可からず、吾人は嚴光の爲めに、其の茲に出てざるを惜んで措かざる所のものなり。

仕を以て羞恥の事となす、是れ或る徒の偏見のみ、頑節のみ。古賢天下を正さんと欲す、己を辱かしむることさへも辭せず、況んや、其の仕進の徑路に於て、正命に從ひ、俯仰天地に愧ぢざるの行動に於ける、抑亦何の顧慮する所ぞ。

溫公の初心、天下に在り。溫公と天下とは殆んど、先天的關係を有せりと謂ふも、決して誇大の言にあらず。溫公の學問、已に聖賢の域に入れり。學問は抱負を大にす、公豈に處士の小節に拘束するものならんや、否、天人共に之を容れざるなり。

漢唐宋、士を取るに科舉の制を以てす。科舉か、科舉か、余は正に斷言す、天下の士を逸するは、即ち是れ科舉の制なりと。

科舉の制に由りて、得る所の士は、即ち是れ小才士のみ、小有司のみ、鑽豆的、牙籌的、小人物を得るに止まるのみ。決して宰相鹽梅的大人物を得る所以の道にあらず。科舉の制は、螻蟻を制すべし、呑舟の魚を逸するの遺憾なき能はず。

公の學問と、抱負は、決して科舉的のものにあらず、若し天下の士、仕官せんと欲するもの、必ず科舉に由らざれば、進むこと能はずとなれば、公は、其の煩碎に堪ふる能はず、其の身は、如何に救濟的大抱負を懷けるに

せよ、公は早くも其の心を仕途に絶ち、山の茂からず林の密ならざらんことを是れ恐れ、白雲深き邊、二三冠童を拉して、終生斯文を樂しむの擧に出てしや知るべきのみ。

朝廷異材異能の士を待つ、必ず科擧に由らず。一朝龍光の布衣草莽に及ぶ所のものあり、知遇感激の結果、聖德大業を輔佐し、守文清明を與にすることを得。公半生の事業、此の遭逢に待つもの、實に多大なりと謂はざるを得ず。

黄山谷、范純甫が言を引用して、公の行事を記述せるの一節に曰へり。

公初めて仕官せし時、年尚ほ少し家人每々、其の齋中に臥し、忽ち蹶ね起きて、公服を着け、手板を執りて危坐するを見る。久しうして率ね以て常となす。家人、竟に其の意を識るなし。純甫、曾て從容之を問ふ。答へて曰く、吾れ時に忽ち天下の事を念ふ。夫れ人天下の安危を以て念と爲す、豈に敬まざるべけんや。

公仕官の初めに於て、既に此の抱負あり、救世長民の大本領は、幼時破甕の當時と更に異なるものあるを見ざるなり。尋常の徒、夢想だに及ぶ能はざるなり。

一夫其の所を得ざるものあれば己推して之を溝中に納るゝが如きの感覺を懷くは、即ち是れ前修斯民を憂ふるの心事ならざる可からず。公が深夜蹶起の行動は、正に是れ前修の心事と同一轍なりと謂はざる可からず。公が深夜蹶起の信念は、爲めに天下の蒼生を生かさしめたるもの幾許ぞ、君心を格したるもの幾許ぞ、秕政を匡したるもの幾許ぞ。異日、天下の重望を負ふに至りたるも、深夜蹶起の結果なり。直言直行、社稷ありて一身なきの勇往邁進的氣象も、深夜蹶起の結果なり。黨類紛爭の間に卓立して、善く調護の實を擧げたるも、深夜蹶起の結果なり。新法の

是非を爭ひしも深夜蹶起の結果なり。畢生の大著述も深夜蹶起の結果なり。功の成る、成るの日に成るにあらず。此の一節は、確に公の事業に於ける全面を掩ふの價値あるものたるを信ぜんと欲するなり。

敬事而信、なる一語は、是れ明かに孔子の爲政者に敎へたる所のものたり。公は深夜蹶起の時に於て可不敬邪の語を發したり。天下の事、敬を外にして、善く之を料理鹽梅するものはあらず。若し之ありとすれば、一時の糊塗のみ、一時の彌縫のみ、一時姑息の手段たるのみ、一時偸安の計策たるのみ、國家百年の大策を建つるの途にあらざるなり。公の敬を言ふは、其の衷心より發露せしものに外ならず。敬を以て天下の事を處理す、事々物々、刀を迎へて解決を見んのみ。公が民に信頼されしも、豈に偶然なりとせんや。

又記す。

交趾、異獸を貢し、之を麟と謂ふ。公の曰く誠僞知る可からず。其れを信ならしむるも自ら至れるにあらず、以て瑞となすに足らず。若し僞ならば、遠人に笑はれん。願はくは厚く賜うて之を還せ。因て賦を奏して以て諷す。

詩に鱗趾を言ふも、是れ聖人の微言のみ、豈に明かに此の物ありと謂はんや。國家の祥瑞は、麟にあらざるなり、鳳にあらざるなり、龍にもあらず、白雉にもあらず、甘露の降下にもあらず、奇木の双對にもあらず、只大寶ありて本朝に立つに在り。公が異物の獻を斥けたるは、彼れ王旦輩が漫に祥瑞を稱し、封禪を慫恿したるの跡と相逕庭する所のもの、果して幾許ぞ。

しかも、蘇東坡は、盛に王氏を稱述せり。彼が三槐堂銘中には、殆んど全力を集注して王氏を賞贊せり。宋代封禪のことを云爲するに至りたる

は、王氏實に之が俑を作りたるなり。封禪祭祠の事、固より是れ一時泰平を僞飾扮裝するの僻事たるに過ぎず。其の之をなしたるが爲めにして、人主の心を蕩し國幣を靡するもの、其の幾許なるかを知らず。故に社稷を憂ふるの臣は、必ず之を排斥し、之を未發に防ぐことを爲す。諛臣己の秕政を掩ひ、天下の耳目を欺き、泰平を粉飾せんと欲し、其の之を爲さんことを勸む、名を求むるに汲々たるの君、忽ち諛言に欺罔せられ、遂に妄舉に出て、以て識者の議を招くもの、往々にして足らざるなり。宋代封禪の一事は、王氏に依りて提供せられ、眞宗の當時、爲めに宋代の歷史に一大汚點を印したるは、寔に明白なる事實なりと謂はざる可からざるなり。

然るに、東坡は何の意か、强ひて言議を其の間に挾むことをなさゞるのみならず、更に當時の首謀者發頭人とも呼ばるべき、王氏其の者を記述するに當り、天下の眞宰相の如くに、之を鼓吹し、之を稱道したるは、抑も何の故か。

東坡の性行より推すも、彼が洒脫逸宕なる、彼が出世脫塵なる性格よりも、鬼神に媚ぶるが如きの愚をなさゞるや知るべし。且又彼が勢利に淡泊なる、王氏の子孫に諛辭を呈するの必要もなきこと推知するに難からじ。然るにも拘はらず、東坡にして猶ほ此の言をなす、是れ實に疑問中の疑問たらざる可からず。

文帝、曾て賈誼の材を聞き、此を宣政殿に召見せし時、政事を問はずして、鬼神の事を問ひたる、後世詩人の刺譏を免れず。宋末の高士、林和靖は、終世封禪の書を作らざるを以て、其の操守を矜り、人も亦其の氣慨を稱せり。封禪の事、成德高標の士、皆之を口にし、之を筆にするを以て耻となす。之を唱道鼓吹するものは、曲學阿世の徒にあらざれば、君の惡を逢へ

んとする一諛臣に過ぎざるなり。

公が麟瑞を斥けたるの一事は、業に已に眞宗當時の弊に懲りたるものあればなり。公は再び王旦一派の輩の出てんことを恐れたればなり。諛臣の接踵して祥瑞の說を進め、爲めに人主の心を蕩せんかを氣遣ひたるなり。大人の用意は、常に凡衆の見て以て常事なりと思へる常事の上に注がれずんばあらず。公が常に人主の心を格さんとするの大人的抱負、是に於て見るべきのみ。

一時泰平を粉飾し、當代の耳目を欺罔せんとするが如き陋劣なる手段は、公決して之を爲さゞるなり。若し些の形跡の之に類するものあらんか、公の赤誠と、公の熱情は、決して之を許容せざるなり。公の學問と相撞着するものあるなり。學仕優長、公の至誠より出てたる施措は、之を前修に照らして愧ぢず、之を往古に徵して疚しきものなきなり。苟も公の

心を以て、官守に任ず、胸中常に綽々として餘裕なくんばあらず。

其五　直言と明鑑

直言と明鑑、是れ職の大小を問はず、官守に任ずるもの、必ず之なかるべからず。殊に一官に長とし、幕僚統率の責務を有するものは、上、主上に對しては、直言の責を負ふべく、下、幕僚に對しては、飭厲の任を全うし、上下に對して大責務を負荷する所のものあり、初めて善く治績擧がり、諸事其の宜しきを得るに至るべし。若し大臣にして、此の二要素を缺ぐものあらんには、大臣たるの資格已になきなり。假令ひ、其の身は、朝廷の上に翺翔するも、尸位素餐の徒にして、詩人の譏を免れざるの輩ならずんばあらず。

直にして、之を犯す。其の之を犯すを禁ぜざるなり。孔子も亦曾て子路

に其の微言を漏らせり。進んでは其の惡を匡さんことを思ひ、退いては、其の過を補はんことを思ふは、即ち是れ大臣として、其の君を輔佐するの緊急要件たらざる可からず。此の緊急要件を躬行し來らんには、顏を犯して、直言するの勇氣なかる可からず。大臣の直言は、武將が攻城野戰に於ける功勞の夫れよりも多大なり、九鼎大呂の夫れよりも重きなり。朝にして直言の大臣なからんか、謂ゆる君たるに於て樂しきことなきなり。只吾が言にして違ふなきなりの趨勢は、將に一朝を攪亂して、底止する所を知らざらんとす、殆哉天下岌々乎たり。

直言の士を得んと欲せば、必ず經術の士に之を求めざる可からず。時務を知るは、由來俊傑に在り。俊傑にして經術に通ずるの士にして、初めて、眞の直言をなすを得べきなり。直言も經術に待つあるにあらざれば、以て人主の心を感動せしむるに足らざるなり。以て人主の注意を惹起するに足らざるなり。其の論議の確固卓立するもののあらざるなり。

己を知る、已に難し、人を知る亦決して容易の業にあらず。孟軻氏も曾て言へり、天下を以て人に與ふるは、誠に容易のことなれども、天下の爲めに人を得るは難しと。孔子も曾て曰へり、人の己を知らざるを患へず、唯人を知るを貴ぶと。是の故に、樊遲、知を問へば、直に答へて曰く、人を知ると。

夫れ人を知ることの難きや、此の如く、聖人も亦之を難ぜり。人を知るの明あるもの、古人曾て之を水鑑と稱せり。其の察識の明、水の如く、透徹隱す處なきを言ふに外ならず。苟くも大臣として、人の本朝に立つ已上は、人を知るの明なかる可からず、この水鑑を具備せざる可からず。

堯は、舜を知り、舜は禹を知る、禹は益を知り、又啓を知る。此等は皆聖人の資、固より論外ならずんばあらず。湯の伊尹、高宗の傳說に於けるも、亦

之と其の歸を一にせり。鮑の管に於ける、夷門の魏の公子に於ける、其の人を知るに於ては同一なり、敢て軒輊を其の間に置くべきにあらず。知人の明あるものは、確に聖門に於て、一德を具へたるものと謂ふとも、決して溢美の言にあらざるを信ずるなり。

沛公、張良の用ふべきを知り、其の謀必ず從ふ、水の下きに就くが如く、蕭何、韓信の用ふべきを知り、其の走ると聞き、倉皇之を追ひ、之を沛公に進めて、大將の大任を授け、孝武、霍光の深厚忠實なるを知り、遺言して孝昭輔佐の任に當らしめたり。彼が霍光に授くるに、周公、成王を負ふの圖を以てしたるが如きは、如何に善く光の性格を知りたるぞ。實に當時史上の一大美事と謂はざる可からず。

公孫述は、未だ馬援を知るに至らず。馬援は、早くも、公孫述、隗囂の共に事を爲すに足るなきを知り、之を見限ると同時に、直に心を雍洛に傾

け光武の眞帝王の資あるを知り、明かすに、其の心腹を以てし、遂に光武の爲めに汗馬の勞を取り、伏波將軍の名を博し得たり。鄧禹が光武を道途に迎へたるも、伏波の知と其の符を合するものならずんばあらず。

郭泰は東漢の末造に於ける、一偉人なり。彼は士間に於けるの傑士なり、彼は書生間に於けるの傑士なり。大學の書生三萬人の多と雖も、彼の一擧一動に注視するなり。彼の一進一退に傾心するなり。彼の去就は、當時士林の去就なり、當時書生三萬人の去就なり。彼は、當時士林書生の本體たるなり、士林書生は、彼の幻影たるなり。彼は聲なり、士林書生は響なり。一時響應景從せしもの、彼が如く、其れ盛なるものはあらず。

彼は、此の如く其れ一時其の盛を極めたり。而して、彼が此の如く其の盛を極めたる所以は、決して偶然にあらざるなり。彼は善く人を知れり。或は破甑によりて、或は危坐によりて、彼に知られたる所の徒輩は、或は

大學に入りて異日大成を博し得たり。彼は、此の如く明鑑の資に富むを以て、善く後進を知り、後進を誘掖啓發せり。彼偃蹇仕へずと雖も、彼が人を知るの明に至りては、東西漢を通じて、多く其の類例を見ざる所なりとす。

徐庶ありて、明孔を知り、玄德三顧の結果、深く孔明を知り、孔明三顧の禮遇に感慨するの至誠、玄德の爲めに、其の一身を捧げ出しぬ。玄德も亦孔明の他意なきを知り、將に殂せんとするや、寄するに、大事を以てしたり。知も玆に至り、寔に大なりと謂ふべきなり。

藝祖の趙普に於ける、深く趙普を知るものと謂はざる可からず。宋の大業は、趙普の手に依りてなされたるなり。人君たるもの、善く人を知りて之に任じ、大臣たるもの、善く人を知りて、部下を飭厲す、國家の慶事之に過ぐるものはあらず。泰平を望まざらんとするも、得べからざるなり。

以上の論述に由れば、直言の大臣に於ける、彼が如く其れ大に、水鑑の大臣に於ける、彼が如く其れ重し。いて溫公の直言と、水鑑とに就きて、二三の事實を示し、更に論述する所のものあらんとす。

公の逸事を記述せるの言行錄は、更に吾人に敎ふるに左の事實を以てせり。

仁宗崩じ、英宗、哀毀を以て疾を致せり。慈聖光獻太后政を聽く。公、首として上疏して言はく、章獻明肅太后、先帝を保んじ佑け、賢を進め、奸を去り、趙氏に大功あり。特だ外戚小人を親用するを以ての故に、謗を天下に負へり。今太后初めて大政を攝す。大臣、忠厚なる王曾が如く、清純なること張知白の如く、剛正なること魯宗道が如く、質直なること薛奎が如き、當に之を信用すべし。鄙俚なること馬季良が如く、讒諂なること羅崇勳が如きものは、當に之を疎遠すべし。則ち天下服せんと。

豹を見るに、管を以てす、未だ其の全豹を見る能はずとするも、猶ほ其の一斑を窺知するを得べし。

凡そ、天下の弊事を除かんと欲せば、最も迅速に英斷を施さゞる可からず。此の間に處せんには、快刀亂麻を絶つ底の手腕なかる可からず。若し遲疑逡巡するものあらんには、障碍百端、左支右吾、遂に一事を成す能はずして止むもの、一再にして足らず、殊に國家大故ある時の如き、言職あるものと雖も、時に斐回顧望するの遺憾なき能はず。此の間、斷々乎として、直言敢行して、忌憚する所なき底のものは、必ず非常の人ならざる可からず。非常人にして、初めて善く、非常のことを遂行するを得べきなり。

仁宗の崩後、英宗の至孝なる、哀毀禮に過ぐるを以て、疾を致すに至る、實に國家多事の時なりと謂ふべし。若し庸衆人を以て、此の間に處らしめたらんには、左右遲疑の結果、敢て一事の施爲する所のものあらず。小人間に乘じて起り、天子を籠蓋し、君子を陷擠し、自己の榮利を計り、國家を誤まり、亂と亡とを招くもの、比々皆然らざるは莫し。溫公は已に非常の人、善く非常の斷を爲す。是れ一に公が國家社稷に對する、肺腑の至誠より溢出し、得て禁ずる能はざるものならずんばあらず。

由來支那の家國は、小人と外戚とによりて滅亡の憂を演じたり。前漢は如何、外戚王氏に依りて、遂に其の本家本尊を奪ひ去られたり。後漢は如何、前漢の覆轍に鑑みざるにはあらず、然れども、其の極、遂に前漢の二の舞を再演し、其の亂亡の跡は、相類似せるものなしとなさず。六朝の事、唐朝の事、支那史を繙き來らんには、盡く是れ同一轍に出てざるは莫し。公が國家を憂ふるの熱誠は、早くも茲に注がれたり。苟くも其の不可なるを見ては、決して一日も猶豫すべきにあらず。一日を猶豫すれば、國家

一日の不利なり。若し優柔不斷を以て、之を處せん乎、一日の不利は、延いて國家百年の不利なり、遂に國家滅亡の大毒源ならずんばあらず。

公の至誠は、早くも茲に注意せられたり。故に寸毫も、敢て忌憚する所なく、外戚小人の事を以てす、是れ人臣として外戚の間に處す、最も言ふを憚る所のものならずんばあらず。是れ献身的大臣、献身的政事家に、之を望むべく、之を伴食的宰相に望む可からず、之を尸位者流に望む可からず、之を容悅的小丈夫に望む可からず、家國ありて、一身なきものにして、初めて能くすべきなり。

忠厚に王曾を知り、清純に張知白を知り、剛正に魯宗道を知り、質直に薛奎を知り、其の之を信用すべきを言ひ、鄙偎に馬季良を知り、讒諂に羅崇勳を知り、其の之を疎遠すべきを言ふ。其の明鑑、其の透徹、大臣に愧ぢずと謂ふべし。

一國の大政を料理するもの、法規命令の末に齷齪たる可からず。其の人、存すれば、其の政事がる。要は、唯朝廷其の人を得るに在るなり。

舜、天下を有つて、與からず、垂拱するのみと言ひ南面するのみと言ふも、畢竟朝廷其の人を得し結果に外ならず。彼は主として君子八元八凱を擧用したり。彼は主として四凶小人の徒を誅殛したり。然る後、政治は安泰なり、國民は舜を謳歌せり、南風の歌、初めて謠ふべし。

孔子、魯の司寇となる、主として政を亂るの太夫小正卯を誅したり。前修の爲す所、皆其れ期せずして、同一轍に出づるものあるを知るなり。

溫公、主として王曾、張白知、魯宗道、薛奎の任用すべきを言ひ、馬季良、羅崇勳の貶黜すべきを言ふ。其れ其の心、舜が元凱を進め、四凶を退けたるの心と同一なり。孔子が少正卯を誅したるの心と、其の符を合するなり。天下の人心、公の心に同情し、公に歸依し、公に頷手するもの、豈また其の

故なしとせん乎。

更に異本を按ずるに、公の行事を記するものあり、曰く、

英宗其の疾、既に平なり。皇太后政を還す。公、上疏して曰く、身を治むる孝より先なるは莫く、國を治むるは、公より先なるは莫しと、其の言、縷々數千言、切至懇悃、爲めに人主を感動せしものありと。

夫れ人臣として、母子の間に處する、最も言を爲し難きものならずんばあらず、然るを、公善く之を言ふ、公の眼中、唯社稷ある耳、唯國家ある耳。其の言をなすに當りてや、斧鉞の誅も、之を避くるをなさゞるの概ある、蓋しまた知るべきのみ。

又曰く、

王廣淵、集賢院に除せらる、公の言はく、廣淵、奸邪にして近く可からず、昔漢の景帝、太子たる時に、上の左右を召して飲す。衞綰、獨り疾と稱して行かず、位に即くに及びて、綰を待つこと加ふるあり、周の世宗、澄淵を鎮する時、張美州の錢穀を掌り、世宗、密かに求め假ることあり、美力を悉くして之に應ず、世宗位に即くに及び、其の人と爲りを薄しとし、用ゐず、今、廣淵、仁宗の世に當りて、密かに自ら陛下に結ぶ、豈忠臣ならんや、願はくは之を黜けて以て天下を勵ましさんと。

夫れ名爵は、公器なり、人主たるもの、私賞を以て、之を臣下に假すべからず、人臣たるもの、私恩を以て、之を人主に求むべからず、朝に幸位なく、民に幸生なきは、即ち是れ治道の大根本ならざる可からず、人主之を臣に私し臣之を人主に私す、公器濫賞、天下の亂、是れより生ず。

衞綰の疾に託して行かざる、優に其の氣概を見るに足るものあり、張美の世宗に私假す、是れ他日大に求むるものあらんとして爾かるなり。其の心事の陋劣なる、其の面に唾するも、猶且つ足らざるなり。世宗、英明

の資、不世出の傑物たり、安んぞ其の奸を看破せざるものならんや。位に即くに及び、主として、其の人と爲りを薄しとなし、之を用ゐず、何等の快事ぞ。史を讀むもの、覺えず、案を拍ち、節を拍たんとするなり。

廣淵は、仁宗に�“ｃｈｅｅｒｉｎｇ”し、以て他日の資を假らんとす、是れ即ち張美の故智に習はんとなしたるなり。英宗の太子たる時、仁宗に緣り、容悅を太子に取る。即位の曉に於て、大に求むるあらんとす。古往今來、小人の幸位を願はんと欲するもの、皆一樣の胡蘆を畫く、而して人主時に其の奸を見破ること能はざるものあり、遂に天下の大亂を釀生するものあるを致す、慨すべきなり。

英宗、假令ひ、中立なりとするも、若し當時に於て、君實溫公の、其の間に處し、之が輔弼調護に力むるもの、微りせば、一時廣淵の奸邪に瞞せられたるやも知る可からざるなり。幸に公の烱眼卓識なる、忽ち其の奸邪を看破し、廣淵の“ｃｈｅｅｒｉｎｇ”的陋策を施すに途なからしめたるは、世宗の張美を斥けたると、同一の卓見にして、兩々對比、史上の美事、政事上の快事なりと謂はざる可からず。

又記せり、曰く、

延和中、登對して言はく、張方平參政、奸邪貪猥にして、物望に協はず。上、色を作して曰く、朝廷、除拜ある毎に、衆言紛々たり、是れ朝廷の好事にあらず。光の曰く、此れ即ち朝廷の好事なり。人を知るは、帝堯の難しとする所、陛下、新に位に即き、萬一奸邪を用ゐ、臺諫循ひ默して言はずんば、陛下、何に從りてか之を知らん。此れ即ち朝廷の好事にあらざるなり。

參政は大臣なり、國家の樞機に參襄す、固より其の人を擇ばざる可からず。奸邪貪猥の徒、一日も其の地に居るを容さず、片時も其の位に居る

を許さず斯かる徒輩にして、其の地位を汚すとせんか、羣小彙進して、相貧緣し、天下の亂、其の底止する所を知らざらんとす。登對主として言をなし、衆望に副はざるを以てす。國家を思ふの言議、終始一貫して、更に渝るなきを見るなり。

除拜の事、固より君權の發動に存す。人主にして必ず其の人を用ゐんとす、臣下たるもの、時に或は、容喙するを容さゞるものあり。祿を盜み、位を固くせんとするの群小徒輩、往々默して止むに至る。是に於てか、唯人主の爲すがまに任せんとす。是れ國家の不幸たらずんばあらず。除拜進退の時に於て、衆言の紛々たるは、剛直侃諤の士が、此の弊を救はんとするの至誠に出づるの結果なり。國家の慶事、之に過ぐるものなきなり。公常に此の意氣を以て朝廷に立つ。朝廷公に依りて以て重く、群小幸位の輩、公に依りて進むを得ず、偉なりと謂つべし。

又記せり、曰く、

上、曾て從容、公に問ふ、近頃陳升之を相となす、外議如何。公對へて曰く、陛下、宰相を擢用す、臣の愚何ぞ敢て與からん。上の曰く、第だ之を言へ。公曰く、閩人は狡險に、楚人は輕易なり。今陳相は閩人なり、必ず鄉黨の士を接引して、朝廷を充塞せんとす。天下の風俗、何を以てか、更に淳厚を得んと。

鄉黨援引の弊は、東西の歷史、何れの國か、何れの朝か、これなからんや。天下の公器、朝廷の名爵を濫用し、私用し、鄉黨の人を援引し、朋黨比周、以て國家の大事を誤るが如きは、歐陽子の論議、之を證せり。公の眼光は、早くも玆に注がれたり。事に當りて、面折廷爭、主上亦善く、公の心事を諒とす、獻替啓沃の功、是に於てか、其れ見るべきのみ。

又、呂惠卿を評するの一節に謂へり、

主上、惠卿の明辯美才を稱す。公曰く、惠卿の文學辯慧、誠に聖旨の如し。然れども、心を用ゐる端しからず、更に徐に之を察せよと。

呂惠卿は、王安石の羽翼なり、王安石の股肱なり。王安石が、强顏に、非新法派を遠慮もなく、會釋もなく、呰譏免黜し、敢て新法を强行したる所以は、多くは是れ、惠卿あるに由れるなり。惠卿の奸邪は、路人も之を知れる所なりとす。

由來、大奸は忠に似たり。巧に人主の心を逢迎して、容悅をなす、人主悟らず、往々にして其の樊籠中のものとなる。公夙に惠卿の奸を看破し、正言更に忌む所なく、用心不端の四字を以て、鐵案を下す、誠に宜なり。公の至誠を以てす、其の肺肝を見るが如し。惠卿如何に奸邪なりと雖も、焉ぞ其の不善を掩ふことを得んや。用心不端、正に是れ春秋誅心の法と謂ふべきなり。

主上、諫官其の人を得難きに苦み、更に公に詔して、更に適當の人を擇ぶべきを以てす。公退いて、陳薦、蘇軾、王元規、趙彥若等數輩を擧げたり。山公啓事も、公の人を擧ぐるに於て、豈一籌を贏ち得たりと謂ふを得んや。

公、善く人を知る、人も亦公を知るの默契心通なくんばあらず。主上、嘗て、呂晦叔と人物を評隲せる時、偶々談、司馬溫公の事に及ぶ、其の一節に

上の曰く、司馬光は方直なり、其の迂濶を如何せんと。晦叔曰く、孔子は上聖、子路猶之を迂なりと謂ふ。孟軻は大賢、時人亦之を迂濶なりと謂ふ、況んや光豈に此の名を免れんや。大抵事を慮ること、深遠なるときは、則ち迂に近し。願はくは、陛下更に之を察せよと。

晦叔は、深く公の心を諒とし、深く公を知るものと謂はざる可からず、主上、公を評するに方直の二字を以てせられたるは、善く公を知られたりと謂つべし。而かも、其の迂濶を疑ふに至りては、猶當時群小の言に動

かされて、此の言をなせしの嫌なき能はず。晦叔、孔孟を引據して、以て主上の心を翻へす、深く公を知るものにあらざる已上は、決して、爲し能はざるなり。晦叔の辯護的說明は、公の心事行動を評するに於けるの好月旦と謂ふべきなり。

公嘗て御史中亟に拜せらる、上疏して修心の要を論じたり。

修心の要、三あり、曰く仁、曰く明、曰く武。

更に治國の要を論じて曰く。

治國の要、三あり曰く、人を官にす。曰く、信賞。曰く、必罰と。其の說甚だ備はれり、且つ曰く、臣、嘗諫官と爲り、即ち此の六言を以て、仁宗に獻じ、其の後、以て英宗に獻じ、今又以て陛下(神宗)に獻ず。平生學力の得る所、蓋しまた盡く是に在り矣。

君子、仁にあらざれば、名をなす所なし、明にあらざれば、安んぞ知を得

ん。已に知を得ず、安んぞ人を知るを得ん。已に仁、已に明、武にあらざれば、以て仁明を斷行するの資なし。仁明武の三者、實に修心の要たるのみならず、實にまた治國の要たるなり、人君の要道たるなり。苟くも仁明武を以て、修身の要となす、約にして餘裕ある、未だ此の三者の如きものはあらず。克く此の言を服膺せば、道經五千の文字、皆廢すべし、齊論、魯論の要も詮じ來たれば、更に此の外に出てざるべし。公の如きもの、善く書を讀むものと謂ふべきなり。

曰く官人、曰く信賞、曰く必罰、治國の要たる、固より論なし。公仁明武の資を以て、治國の要を行ふ、眞に是棟梁の器なり、眞に是國家の柱石なり。

邵康節、嘗て公を評して曰く、君實は脚實地を踏むの人也と。公深く以て己を知るの言となす。實地を踏む底の人にして、初めて天下の事を語るべきなり。其の一身に於けるも、一國に於けるも、實地實行の人にあら

ざるよりは、寧てか民に信あるを得ん。康節の言は、深く公の肯綮を得るものあり。公眞に其の然るを感ず。是れ決して公の自負にあらず、公の自信なり、公の自白なり。

公、嘗て嵩山に登り、寺に題して曰く。

登山有道、徐行則不困、措足於平穩之地、則不跌。

咄嗟の間、卒爾の中、一時の題言たるに過ぎざれども、十有九字の中、自然に其の性情の發露するものあるを見る、溫厚着實、實地踏査的性行は一言片辭の間にも、亦之を認むるを得、唐節の言、決して其の好む所に阿ねるものにあらざるを知れ。

公、永興軍に知たりし時、上章して曰へり。

臣が不才、最も群臣の下に出づ、先見は、呂晦に如かず、公直は、范純仁、程頤に如かず、敢言は、蘇軾孔文仲に如かず、勇決は范鎮に如かずと、其の人に如かざるを知るや、此の如し。人の善ある、猶己にあるが如くするものは、蓋し鮮なし。虛心坦懷、胸中宛も、光風霽月の如きものにあらざるよりは、安んぞ克く茲に出づるを得んや。虛懷己を持し、人を待つの洪量は、固より之を常人に望む可からざるなり。

公、洛陽に居ること、前後十五年、天下望んで以て眞宰相となす、婦人小子と雖も、皆司馬君實を知れり、兒童走卒も、司馬溫公を知れり。此の名聲を博し得たるものは、一に是れ、自ら知り、人を知るにありて存す、而して實地的なり、躬行的なり。直言と、鑒識は、十五年間、一日の如く終始せり。丈夫の能事、其れ終れりと謂ふべきか、非か。

其六　公と新法

新法の害は、今更に論ずるの必要なき也。當時天下の人心は、恟々たり

又擾々たり朝廷の士は、彈劾文を袖にして、安石を彈劾せんと試みたるものありき。安石と共に天を戴くを欲せざるものありき。斯民は疾苦せり。疲弊せり。朝に於けるの薦紳は、互に比周阿黨せんとするに立ち到れり。紛糾、又紛糾、錯雜又錯雜、獨り至尊をして天下を憂へしむるの光景なきにあらず。嗚呼、慘毒を重ねたる時と謂ふべし矣。

而して眞摯溫厚着實なる司馬溫公は、斯る多虞多端の際に遭逢せり、公の心事其れ如何ぞや。

天下の重望は、當時公の雙肩に繫かれり。上下を始め、公の奮然起ちて以て此の紛糾を處理せんことを企足翹望せること晉に大旱の雲霓に於けるのみならず、其の一たび、洛に入るを聞かば、衆庶億兆、額手して道途を遮るの概ありき。公が、其の一身を以て、當時天下の重をなしたるや寔に是の如し、公の責務も實に多大なりと謂はざる可からず。

公已に此の重望を雙肩に負ふ、必ず此の重望に價する丈けの實績を擧げざる可からず、況んや、公の性行として、公が實地的性格を有するの人として、公が家國を憂ふるの熱情よりして、公が斯民の休戚を以て、己が休戚となすの至誠よりして、之を秦越視する能はざるなり、決然起ちて其の衝に當らざる可からざるなり。

公は主として新法の害を極論したり。青苗の法、免役、將官の法を論じ必ず新政を革新せんことを期せり。日夜鞠躬盡瘁、滿腔の熱情を捧げて此の事に鞅掌せり。

光紹元年、公疾を得、然れども、公の心由來天下に在り、其の疾を忘れ嘆じて曰はく、青苗、免役、將官の法、未だ廢せられず、西戎の議未だ決せず、是れ今時の四患なり。四患未だ除かず、光假令ひ死すと雖も、瞑する能はざるなり。

荀息は、國難を報ぜざるの故を以て、敢て瞑目せず、宗澤は、其の身將に死せんとする時、猶河北を過ぎんことを三呼せり。大人の志、其家國に在りて、瀕死且つ其の私事に及ばざること、古今其の揆を一にするものなくんばあらず。公が其の瀕死に於て、猶四患の除かざる可からざるを言ふ、其の心事の光明落々たる、寔に欽仰すべきなり、寔に景慕すべきなり。

公已に其の疾病也、折簡して呂公著に與へて曰く、光已に身を以て賢に付し、家事を以て愚子に付したり、更に顧慮する所のものあらず、唯家國未だ託する所あらざるなり、今以て公に屬する所あらんとすと。

賢者は、其の死を憂へず、其の國の衰ふるを患ふ、故に賢者ありて、而る後に死すべしとは、是れ蘇老泉の吾人に教ふる所、公は確に此の覺悟を有するなり。

公の憂ふる所は、公の死後、新法の益々其の害毒を流布せんことを恐るゝなり。苟くも、其の害毒を防がんと欲せば、公の死後、復た一つの公を擧げて以て之に代はらしめ、以て其の衝に當らざる可からず。若し其の子にして、克く之に堪ふるものあらんには、其の子を擧ぐるも可なり。外擧は以て讎をも避けざるべく、內擧は以て其の親をも嫌はざるは、是れ古人賢を擧ぐるの公なり。公にして、其の子を擧げざる所以のものは、其の子の不肖を知ればなり。已に其の子の不肖を知る、之を外擧に求めざる可からず。外擧呂公著を擧ぐ、鑒識の明、實に稱すべし。

公は呂公著に託するに後事を以てせり。假令ひ四患除く能はずとするも、呂公著にして存せば、天下の事、なほ憂ふるに足らず、死して其れ瞑すべきなり。

公の疾、癒えず、朝請し難し。既にして、朝覲を免じ、肩輿に乘り、三日に一たび入省するを許さる。

公は國家の中心なり、朝廷の之を優遇するは、固より其の所なりとす。肩輿入省の事、公を待つ所以の道に於て盡せりと謂ふべし、然れども、公の忠厚の資に富める、敢て以て當らずとなし、君を見ざれば、以て事を視ずとなす。因りて公の子、康に詔して扶けて入り對せしむ。公直言四害を論じ、直に勅を降して之を罷めんことを乞ひ、且つ新政の弊事を論じて、悉く之を改廢せんことを乞へり。朝廷其の言を納れ、皆、之に從へり。公は至誠君國に殉するの熱情を以て、遂に青苗を罷め、常平法を復せり。天下の蒼生は、方に公に依りて以て蘇生せり。

新法提供の當時、若し公の阻格するもの微りせば如何、假令ひ、此の新法提供案に反對するものあるも、王安石の執拗强顏なる、必ず之を遂行して、天下に大害を流さんこと疑ひを容れざる所なり。若し又安石にして、內外の攻擊反對に顧慮する所のものありて、之が提案も撤回するこ

とありと假定するも、朝廷は依然として黨爭紛糾の中に葬られ、其の弊の窮極する所、言ふ可からざる悲運に陷らんとす、思ひやるだに寒心すべき事ならずや。

黨爭紛糾の間に處し、調停擁護、能く其の危機を救濟し得たるもの、抑も何の術ぞ、其の敏腕練手の致す所か、其の機宜の適中を得たるものあるか、機宜の適中もあるべし、敏腕練手も必要なり、然れども、未だ此の二要素のみを以て、能く此の難關を救ひ得べしとはなさゞるなり。此の二要素を具備すると同時に、上下に對して、重望を負ふものなかる可からず。此の重望ありて後、初めて善く茲の間に居るを得べし。當時の朝廷に見んか、其の人、獨り公に於て、之を望むべきのみ、

神宗の時代に於ける問題は、安石問題也、新法問題也、安石問題と、新法問題とは、當時政界の一大紛爭點たる也、當時政權の波瀾問題たる也、猶

ほ極端に之を謂はん乎、當時政治家の勢力消長問題たる也、政權爭奪問題たる也、一方には黨派的問題たる也。

安石固より其の性や、剛愎執拗、之に加ふるに學博く、識高く、優に經世家、大政治家たるの鬼手蜋腕を有す。彼を以て當時朝廷の士を視る、固より猛虎負嵎の概なき能はざるなり。彼已に此の概を以て一方に睥睨す、名利の徒は彼の脚下に叩頭せざるを得ざるなり。彼は自己勢力扶植の下に、新法を實行せんと試みたり。

爾り、彼は、天下の利害よりも、新法を楯に、自己の勢力範圍を擴張せんことに熱注せしなり。彼は、自己の名に汲々たるが爲めにして、新法を鼓吹したるなり。猶露骨に言へば、彼は、新法の旗幟を標榜して、當時の政界に一と花咲かせんとなしたるなり。其の心事は、假令ひ、民生衆庶の上にあらずとするも、彼が政治家としての行動は、誠に男らしきものたるなり、寔に花々しきものたるを失はざるなり。

若し一方、同じく安石の如き、野心滿々たる政治家の出づるあらんか、必ず奇貨置くべしとなし、自己の幕僚の下に、反對の記號を翻し、民生の利病得失は、兎に角に、一大紛爭を敢てし、神聖なる朝廷を蹂躙せしや、今日よりして、之を想像するに難からざるなり。

幸にして、一方間に居り、敢て自己政爭的に出でざるの司馬溫公あり、一に民生を以て重しとなし、黨爭の紛擾を避けたればこそ、天下は左まで撹亂せられず、新法の流布も、其の前程を防遏せられ、安石の初心も其の期する所のものと相齟齬するに至り、遂には其の參謀と恃みたる、呂惠卿は、手を易へて反間の地位に立つの趨勢を見、宛かも、飼犬に手を嚙まれたるの愚に遭逢して、折角の標榜も自然的に、撤回せらるゝの已むを得ざるの境遇に至りたるなれ。こは安石其の人の爲めには、寔に不

幸なりと雖も、之を國家民生の上より、打算し來るときは、眞に一大慶幸なりと謂はざる可からざるなり。

安石は、矯激的也、司馬溫公は至誠的也、二公必ず衝突を免れず、而して其の衝突は寧ろ性行の衝突と言はんよりも、政治上に於て衝突せり、主義上に於て衝突せり、而して安石は、朝廷をして政爭界たらしめんとしたり、公は極めて之を避けんと力めたり、公が避けんと力めたるの行動は大に天下輿衆の同情を惹き、公は遂に此の圓滿滑脫なる政策に於て、見事成功せり、見事成功して、野心勃々たる安石の鋭鋒を挫きたり。

嗚呼、新法と安石、安石と君實、君實は、寔に宋代の偉人なりと謂はざる可からず、公が時艱に遭逢したる丈け、夫れ丈け、愈々公の大器を發揮せしものあるを見るなり。

其七　安石と司馬溫公

前來已に論述せし如く、一方に溫玉の如き一大偉人司馬溫公あると、同時に一方、辣乎棘の如き王荆公其の人あるを記憶せざる可からず。

均しく是れ宋代の偉人たるを失はざるなり、而して其の性行は、全く相反對せり、全く天と淵となり、月と鼈となり、油と水となり、氷と炭となり、吾人は、試みに、老泉蘇軾の眼に映じたる、安石觀を卿等に紹介せんとするなり、否必ず之を紹介するの已むを得ざるものあるなり。

老泉の辯奸論は、何の爲めに作れるか、其の言は諷刺的なり、露骨ならず、然れども是れ徒爲の作にあらず、老蘇の安石と相容れざるは必ずしも智者を俟ちて之を知るにあらず、彼は一篇の辯奸論に託して、自家の磊磈を注き、安石を排斥し、共に本朝に立たざらんと欲し、世の注意を喚

起したるに外ならざるなり、世人を警醒せんとしたる婆心に外ならざるなり。老蘇の眼光や、實に透明なりと謂はざる可からず。

其の子蘇軾は、韓非論を作れり。是れ果して何の意ぞ。謂はずして知る、王安石を諷刺するものなるを。蘇子と王安石とは、其の家學に於て、絶對的反對の地位に立てり。

韓非の學、由來專ら法に任ず、其の慘礉にして、恩少なき、太史公已に之を言へり。安石の人と爲りと、其の學問とは、頗る韓非の專ら法に任じ、刻薄なる點と相一致せり。韓非を假りて以て、王安石を論ず、寔に恰當の論法なりと謂ふべし。

子瞻は、更に荀況論を作れり。是れ亦假りて以て王安石を論ぜしに外ならざるなり。荀卿の性質は、頗る亦安石と相匹似せり。彼は其の論中に謂へり、其の人と爲りや、剛愎不遜、自ら許す、太だ過ぐと。嗚呼、是れあるかな、是れあるかな、何ぞ其の言の適切にして、吾人の肯綮を得たるや。安石は、如何にも、剛愎也、不遜也、自ら許すこと太だしきに過ぎ、眼中更に人なきが如し。安石の眼根に適中する、方に之より切實剴備なるはあらず。

更に彼は、始皇論を著せり、更に漢宣を論ぜり、更に商鞅を論ぜり、始皇は何を指すか、漢宣は何を意味するか、商鞅は、何を指斥するか、其の論の歸着點は、如何。

漢宣、始皇、是れ取りも直さず、神宗を風するの微言なり。其の商鞅を論ずるは、即ち是れ王安石を論ずるなり。鞅の變法は、安石の變法と相似たるなり。商鞅の自ら恃みて、古法を敗壞して更に顧慮忌憚する處なきは、安石の新法を提供して、古制を更革したるものと頗る相類似せり。鞅と安石、始皇漢宣と神宗、其の英資卓邁に於て、亦太だ相似たるものなくんばあらず。

蘇の安石と相容れざる此の如し、司馬君實と、王安石との關係、亦此の如きものなくんばあらず、然れども、君實の溫摯なる、正面的排斥に出づるを力めて避けんとせり。

吾人は、勞ひ聊か王安石の閲歴を讀者に紹介せざるを得ざるの時機に遭逢せり。

安石は、仁宗英宗神宗に事へ、位は、亟相左僕射司空に至り、舒王に追封せられたり。

安石、好んで書を讀めり、而して尤も强記博覽、書として讀まざるは莫し。讀むこと一過すれば、輙ち誦を成し、終身忘れず。其の文を屬するや、筆を動かすこと飛ぶが如く、初めより意に措かざるが如く、文成る、見るもの皆其の精妙に服せざるはなし。議論尤も高奇、能く辯を以て、博く其の說を濟ふ。

議論尤も高奇、能く辯を以て、博く其の說を濟ふ、是れ王安石の長所なり、而してまた其の短所ならざる可からず、彼が執拗剛愎、自ら許すも、其の茲に因由するものなくんばあらず。

爾り、彼は執拗剛愎也、彼は尤も功名心に富めり、彼は、野心家也、彼は好事家也、斯る性行を先天的に具有する彼は、何が故に驟かに美官を求めざりしぞ、何が故に、朝廷、彼を除拜せんとする毎に、辭讓して容易に就くことを肯ぜざりしぞ。曰く、是れ彼が虛僞也、大なる野心家たる實を揜はんとするの策也、大に人望を收集し、他日大發展の餘地を扶植せんと力めたるに外ならざるなり。其の恭儉辭讓は、頗る西漢の王莽が、諸父に奉事せしの恭儉辭讓と相似たるものあるなり。若し詩人白樂天をして之を歌はしめんか、王莽と一對の好題目たるべきか。

司馬溫公、嘗て言へり、若し我、王介甫と同じく、群牧司判官たり、包孝肅、

使たり時に清嚴なりと號す。一日、群牧司の牡丹盛に開く、包公酒を置き之を賞す。公、酒を舉げて相勸む。光、素より酒を喜まず、强ひて之を飲む。介甫、席を終るまで、遂に飲まず。包公、强ふる能はざるなり。光、此を以て、其の屈せざるを知ると。

是れ固より小事なりと雖も、其の行動によりて以て之を推す、溫公と王安石の性行は、此の間に於て、全く其の天分を異にするものあるを見るなり。溫公已に此の時に於て、介甫を看破したりと謂ふべし。

仁宗の時、王安石、知制誥たり。一日賞花釣魚の宴に、內侍各々金楪を以て、釣餌藥を盛りて几上に置く。安石、之を食うて盡す。明日、仁宗宰輔に謂うて曰く、王安石は、詐人也、誤て釣餌の一粒を食はゞ即ち止まん、之を食うて、盡すは人情にあらざるなりと、常に之を樂まず。

是れ明かに、安石の剛愎不遜の本性を顯はして、綽々餘裕あるを見るなり。若し其の非を知らば、速かに之を止めんのみ。其の非を知りて、猶其の非を遂ぐ、執拗不情、殆ど之に過ぐるものなからん。仁宗已に其の人物を看破し去る、蓋に稀代の英主と謂ふべきなり。

後、安石、自ら日錄を著はして、痛く祖宗を厭薄す、中に就きて、仁宗尤も甚し。每に謂はく、漢文帝、取るに足らざるなりと、漢文帝を非議するは何の意味ぞ。其の心常に仁宗を薄しとすればなり。其の意仁宗に滿たざるものあればなり。刻薄にして忍なる、安石の如きものは、多く其の比類を見ざるなり。

更に安石の逸事を記せる書編は、其の行事を吾人に紹介せり。

安石、知制誥たる時、吳夫人、爲めに一妾を買ふ。公、之を見て曰く、何物の女子ぞ。曰く、夫人、事を左右に執らしむ。曰く、汝は誰氏ぞ。曰く、妾の夫、軍の大將となり、米運を部して舟を失ふ、家資盡く沒して、猶足ら

ず、又妾を賣りて以て償ふ。安石、愁然として曰く、夫人、錢を用ふること幾何にして汝を得たる。曰く、五十萬。安石、其の夫を呼んで、夫婦たること初めの如くならしめ、盡く錢を以て之に賜へり。

司馬溫公、亦太だ之に類するの逸事あり。

溫公、潁公に從ひ、辟されて太原府の通判となる、尙未だ子あらず。夫人、爲めに一妾を買ふ。公、敢て顧みず夫人、忌む所あるかを疑ふ。一日、其の妾に敎へて曰く、汝我が出づるを俟ち、自ら粉飾して書院の中に至れ、寓はくは、公の一たび顧みんことを。妾其の言の如くす。公、訝りて曰く、夫人出づ、汝安んぞ、此に至るを得んや、丞かに之を遣る。後、潁公、之を知り、僚屬に對して頻りに其の賢を嗟嘆せりと。

溫公と安石と、聲色を近づけざること此の如し、啻に聲色を近づけざるのみならず、官職を愛せず、貨利に淡泊なる、皆同じ。更に其の逕庭するものあるを見ざるなり。

溫公と安石と、時に其の性情の或る點は、相一致せり、或る點は一致せりと雖も、亦或る點は、甚だしく相背馳せり、其の性行の相背馳したるものありたりと雖も、是を以て、直に公と安石と、其の交情に於て、相反目せり、相疾視せりとなすは、速斷的誤謬なり。

公と安石とは、其の性情の相異なりたるものにありたるにせよ、其の交情は、極めて親密なりしなり、平生相善かりしなり、唯其の相合はざるに至りたるは、新法を論ずるに至りたる時なり。

天下公議の爲めには、私情の如何を顧みるに遑あらざるなり。安石は進退を賭して以て新法を强行せんとせり。溫公は生命を賭して以て新法を阻遏せんとせり。勢ひ茲に至れば、互に鎬を削らざるを得ざるなり。公は、遂に安石に書を贈り、最後の引導を渡したり、最後の引導とは何ぞ

や、曰く絶交の書これなり。

安石、晩年鍾山書院に於て、多く福建子の三字を寫す。蓋し呂惠卿を悔恨する也、惠卿の爲めに陷れられたるを恨む也、惠卿の爲めに誤まられたるを悔ゆるなり。山行する毎に、多く恍惚として獨語すること狂者の如し。安石已に疾病せり。和甫、邸吏の狀を以て、安石に示し、適々司馬公相となるを報ず。安石、悵然として曰く、司馬十二相となる矣。遂に死せり。

溫公また病中に在り、之を聞き、呂申公に簡して曰く、王介甫他なし、但だ執拗なるのみ、贈恤の典、宜しく厚くすべきなりと。

溫公の臨終と云ひ、安石の臨終と云ひ、一語の私事に及ばざるや、皆同じ。安石も亦決して尋常の徒にあらざるなり。其の惠卿を云爲さるは、是れ殆ど一場の囈語たるに、宛かも痴人の說夢と一間なるの譏なき能はず。然れども邸吏の報を聞き、司馬十二作相矣の七字は、如何に鬱勃淋漓たる文字なるかを知るに足る、如何に胸中の不平を溢出し來りたるものなるかを知るに足る。彼が生死以て新法を强行せんとせしの血情熱誠を想像して猶餘りあり。彼は、溫公再び宰輔となるに至れば、新法の運命も、業に已に其の沒前程たるを知れり。既に其の瞑目たるを知れり。溫公の入閣は、是れ新法の沒前程たるのみならず、彼が生命に於ける、善智識の引導たる也。彼の執拗剛情なる、決して善智識の引導を待つも、嬉しく成佛するものにあらず。彼は、新法を抱きて、飽くまでも、六道の辻に迷はんとせり。故に其の臨終に於て、愈々益々其の執拗なる性情を發揮したり。

死に臨み、其の執拗なる性情を露はしたると同時に、彼が、宋代に於ける大偉人たる性格をも露はしたり。彼は新法と生死せんと欲し、臨終猶言の此に及ぶ、決して通常人の能くなす所にあらず。彼は、何處までも一

方の旗頭たる性格を具備せるなり。吾人は或る程度までは、彼に同情を寄するに吝ならざるなり。

温公は更に之より大なるものあり。安石當面の敵は、公なり。公の進退は、安石が進退に於けるの一喜一憂たるなり。安石臨終の七字は、益々公の人物を偉大ならしめたり。公をして華嵩の如く、泰斗の如くならしめたるなり。此の一語は、公が身邊に於ける、名譽の光輝なり。

公は、政治上、主義の上に於ては、安石當面の敵たり、正反對の地に立つに拘らず、其の私情、其の元老を思ふの公情に至りては、寸毫も損益する所のものあらざるなり。贈恤の典、宜しく厚きに從ふべきを以てしたるが如き、其の盛德大量、眞に政治家たるを失はざるなり。

安石、嘗て言へり、新法を議せしより、終始行ふべきを言ひたるものは曾布なり、始終行ふ可からずと言ひたるものは、司馬光なり。餘は皆前は叛き、後は附き、或は出で、或は入ると。

微頭微尾、王安石の忌憚畏敬せし所のものは、司馬温公なりとす。執拗は、到底至誠に打ち勝つ能はざるなり。

龜山語錄に曰へり。

安石、天下を治むる、專ら法度を講究す。彼が身を修むるの潔なる、宜しく以て民を化するに足るべし。然れども、卒に王文正、呂晦叔、司馬君實諸人に及ばざるものは、其の爲す所、誠意なきが爲めなりと。

明道先生は曰へり。

關雎麟趾の意ありて、然る後に以て周官の法度を行ふべしと。

安石に責むるに、誠意なきを以てす。是れ實に春秋の筆意ならざる可からず、唯一の誠意を缺く、與衆の同情を買ふ能はざるなり。彼誠意なきが爲めにして敗る、寧ろ惜しむべからずとせんや。

更に明道が、關雎麟趾の言を以てしたるが如きは、迫らず、從容の間に、王佐の才、宰輔の器たるの骨子神髓を露出したる妙論なりと謂はざる可からざるなり、

溫公、曾て言ふ、王氏を覆さんものは、必ず惠卿ならん、小人本と、利を以て合ふ、勢傾き利移らば、何ぞ至らざる所あらんと、其の後、六年にして惠卿果して安石に叛く、是に由りて天下公の先見の明あるに服す、

安石は何ぞ早く惠卿を看破せざりしぞ、彼が其の疾病なるに及び、福建子を連呼するも、將た又何の益ぞ、

蓋し、人の末路、多く安石に類するもの多し、吾人は、寧ろ之を以て彼を責むるの酷に失するなきかを疑ふなり、

其八　司馬溫公と資治通鑑

誰れか言ふ、著述は前烈の餘事と、著述の事、固より重し、身、才學識の三長を具備せるにあらざれば能はざるなり、精力根氣の迥かに人に卓越するものあるにあらざるよりは、決して能はざるなり、古昔の史を修するもの、已に才學識の三長を具備し、而して時に發憤の餘に成れるもの多しとなす、故に史乘の外、己の公憤を發露するもの、少なしとなさず、

左丘明氏は、如何、彼が浮虛誇大の文字は、如何にして作られたるか、彼は已に其の明を喪へり、彼が其の明を喪ひたるの公憤は、遂に迸出して、浮誇雄大の一史乘を現出せり、彼の史傳を讀むものは、如何に彼が自己誇大の筆力を弄したるかを知らん、彼は、史として其の寫實よりも、寧ろ自己を衒はんことに力めたるの形跡なきにあらず、故に傳文盡く信ずべからず、の譏を免れず、然れども是れ史家の常套のみ、發憤の餘情のみ、強ちに之を責むるは酷なり、

司馬遷は如何。彼の史記、同じく是れ發憤の餘情なりと謂はざるを得ざるなり。彼は、其の父、談の時代より、國家の文籍を主どりたりとは言へ、性格、直行直言的なる彼は、李陵の事を云爲したるに關し、其の身は、士太夫の尤も羞づべき宮刑を受けたるなり。士已に宮刑を受く、功名何れの處にか求めん。彼の前程は、已に沒せられたるなり、死せんか、名なし死せざらんか、筆札を借り以て、國史編纂のことに當り、自己の本領を發揮し、之を不朽に傳へ以て身後の名を博せんと欲したるなり。彼が任安に報ずるの書中には、反復して、此の微意を漏らしたるものあるなり。故に彼は傳記に假り、自己の鬱勃を訴へ、時に推挽の人に遇はんと求めたるもの、往々にして足らず。彼の或る傳記は、血を以て作られたり。淚を以て作られたり。彼が侯を遠け、惡を惡むの直情的性行は、文字の上、言外に於て、躍如たるものなきにあらず。故に彼の史を讀むものは、彼と共に怒らんとす、彼と共に泣かんとす。當時彼の境遇に想到せば、吾人亦同情の淚なき能はざるなり。

更に班固は如何。彼は、直辭、忌むことをなさゞりし結果、卒に獄に下れり、一部の漢書、多くは是れ發憤の餘瀝なりと謂はざる可からざるなり。其の他、逐一其の類例を列擧せんか、吾人は當に其の煩に堪へざるべし。畢竟するに、古來の史家、史乘を假り、以て自己の轗軻を漏らさゞるものは、鮮なし。

獨り公の史は、如何。大部浩瀚なる資治通鑑は如何。是れ同じく公發憤の餘瀝なるか。否、然らず。然らば則ち、如何なる動機に由りて、此の大部浩瀚なる一大編著はなされたるか。是れ吾人の聊か研究せんと欲する問題ならずんばあらず。

吾人は、司馬溫公の通鑑編述は、迥かに在來の編述と其の撰を異にす

るものあるを信ず。

吾人は、今編述の由來する所を説明せんとするに於て、茲に先輩の所論を紹介して、之に易へんと欲するなり。

王安石は、飽くまでも、新法を强行せんと力めたり。已に新法を强行せんと欲す、之が前路を遮蔽するの障害物を排除して起たざる可からず之が目の上の瘤を除かざる可からざるなり。之が目の上の瘤とは何ぞ上來已に論ぜし所の司馬溫公也。

安石の狡獪にして機智に富める、遂に何時しか、神宗の心を動かしぬ。神宗は、安石の新法に左袒したるなり。主上は已に安石の手の中のものたるなり。獨り患ふる所のものは、司馬溫公也。如何にして司馬溫公を退けんか。過失の指斥すべきものなきなり。公は朝廷上下に對して、大なる重望を負へるの人なり。若し下手を見んか、忽ち自身の失敗を招かんな

り。此の間、安石たるもの、實に苦肉の計に出てざるを得ず。

前輩の論に曰はく。

當時神宗、王安石を用ゐ、以て新法を行はんと欲す。之を議するものあれば則ち職を褫ひ擯斥し、甚しき者は、之を貶謫す。是に於て、朝野竦然、競うて迎合を以て容を取る。獨り君實、溫厚正直、事苟くも當らざる者あれば、意を屈して以て人に從はず。故に其論、每に安石と協はず。神宗、之を斥けんと欲するも、誣ふべきの愆ちなし。故に陽に先志を承け、編摩を督勵すと稱し、因りて以て之に冗官を授け、其れをして廟堂の議に參するを得ざらしめ、遂に新法の毒を天下に流す。

嗚呼、此の論、實に肯綮を得たりと謂つべし。公に授くるに散官を以てし、而る後に、新法を行はんと欲す。其の計や、寔に當れりと謂ふべし。然らば則ち、公たるもの、此の間の消息を知らざるか。其れ綸言汗の如きもの

なるを如何せん。

公は是より洛に歸れり、更に時事を論ぜざりき。詔を奉じ、閉居して出てず、一意專心に、編述の事に銳意勵精し、稿を起す、上周の威烈王の事に初まり、下五代に及び、周の世宗に至りて止む。蓋し公が史を編述するに於て費したる年數は、十九年の久しきを歷て、善く全部を完成せり、成るに及び、神宗殊に名を資治通鑑と賜ふ。抑〻亦史乘の名譽と謂はざる可からざるなり。

十九年の歲月、實に短しとなさず、其の間拮据勉勵、亦以て察知すべきなり。故に公は謂へり、編成るの日、平生の精力茲に盡きたりと。

公は、著實なり、故に其の根氣も非常に强きなり、著實にして根氣强し、而して天性至誠の發動を以てす、故に空前絕後の大著述も完成せられたるなり、豈偉ならずとせんや。

公は實に偉人なり、實に精力、人に超えたるの人なり、若し公にして、唯宋代に於ける政治家、眞宰相たるのみにして止み、此の空前絕後の大著述なからんか、假令ひ、一時其の名聲の赫奕たるものあり、後世靑史の頁を埋むるものあるにせよ、公の姓名は、永く後人に記憶せられざるべし。

公は、此の一大編述あるが爲め、公の名を永く後人の記憶に存ぜしめ、公と言へば、資治通鑑を聯想し、資治通鑑と言へば、忽ち公に想到せしむ。文章は實に經國の大業、不朽の盛事、公は此の大著述と共に萬古を通じて不朽也、不滅也、抑亦快心の盛事なりと謂はざる可からず。

然らば則ち、公が一時散官に在り、復た廟議に參畫し、政治に容喙せざりしは、誠に當時に取りては不幸なりしや、敢て疑ひを容るべきにあらざるも、公が身後に於ける名聲の上より、之を言はんか、抑亦一種の幸なりと謂はざるを得ず、知らず、公は前者の不幸を遺憾となすか、將た又後

者の幸に滿足せんか、公を九泉に呼び起して之を問はん。

其九　公の筆法は謹嚴なり

昔時子路、孔子に問うて曰く、子衞君の爲めにせんとす、何を先んずべき。

孔子曰く、先づ名を正さん。子路、其の言を以て迂となせり。

孔子更に曰く、名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば、事成らず、事成らざれば、民其の手足を措く所なし、故に君子は、必ず名を先にするなり。

孔子の衞に在る、是れ果して如何の時なりしか。當時、衞君は、其の父を逐出せり、是れ實に名分を亂すものならざる可からず、之を是れ正さずして、啻に政令法禁の末に馳せんと欲せば、所謂是れ眞の迂愚たるを免

れず、大人政治を爲す、先づ其の大なるものを勉む、子路却つて迂なり、夫子決して迂ならざるなり。

溫公の通鑑は、實に畢生の大著述にして、其の精力を茲に集注したることは、已に之を言へり。公は筆を周の威烈王に起せり、爾り、威烈王に起し、開卷第一、晉の太夫魏斯、趙籍、韓虔を命じて諸侯と爲したるのことを以てせり。

是れ大に公が微意の存せる所にして、王室の衰微と、共に諸侯の橫梁跋扈を聯想し、諸侯の跋扈は、王者已に名分を維持するの權能なきを慨し、而して治亂の因を推し、公編述の微旨を漏らしたり。更に公は莊重瞻嚴の筆を以て、痛切に之を論ぜり。其の論に曰く。

臣光曰、臣聞、天子之職、莫大於禮、禮莫大於名、何謂禮、紀綱是也、何謂名、公侯卿太夫是也、夫以四海之廣、兆民之一

衆、受制於一人、雖有絕倫之力、高世之智、莫不奔走而服役者、豈非以禮爲之紀綱哉、是故天子統三公、三公率諸侯、諸侯制卿大夫、卿大夫治士庶人、貴以臨賤、賤以承貴、上之使下、猶心腹之運手足、根本之制支葉、下之事上、猶手足之衛心腹、支葉之庇本根、然後能上下相保、而國家治安、故曰天子之職莫大於禮也、文王序易、以乾坤爲首、孔子繫之曰、天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣、言君臣之位、猶天地之不可易也、春秋抑諸侯、尊王室、王人雖微、序於諸侯之上、以是聖人於君臣之際、未嘗不惓々也、非有桀紂之暴、湯武之仁、人歸之、天命之、君臣之分、當守節伏死而已矣、是故以微子而伐紂、則成湯配天矣、以季札而君吳、則太伯血食矣、然二子寧亡國而不爲者、誠以禮之大節不可亂也、故曰禮莫大於分也、夫禮辨貴賤、序親疏、裁群物、制庶事、非名不著、非器不形、名以命之、器以別之、然後上下粲然有倫、此禮之大經也、名器既亡、則禮安得獨在哉、

昔仲叔于奚有功於衛、辭邑而請繁纓、孔子以爲不如多與之邑、惟名與器、不可以假人、君之所司也、政亡則國家從之、衛君待孔子而爲政、孔子欲先正名、以爲名不正則民無所措手足、夫繁纓小物也、而孔子惜之、正名細務也、而孔子先之、誠以名器既亂則上下無以相保故也、夫事未有不生於微而成於著、聖人之慮遠、故能謹其微而治之、衆人之識近、故必待其著而後救之、治其微則用力寡而功多、救其著則竭力而不能及也、易曰、履霜堅冰至、書曰、一日二日萬幾、謂此類也、故曰分莫大於名也、嗚呼幽厲失德、周道日衰、綱紀散壞、下陵上替、諸侯專征、大夫擅政、禮之大體、什喪七八矣、然文武之祀、猶綿々相屬者、蓋以周之子孫、尚能守其名分故也、何以言之、昔晉文公有大功於王室、請隧於襄王、襄王不許、曰王章也、未有代德而有二王、亦叔父之所惡也、不然叔父有地而隧、又何請焉、文公於是懼而不敢違、是故以周之地、則不大於曹滕、以周之民、則不

衆於邦莒、然歴數百年、宗主天下、雖以晉楚齊秦之彊、不敢加者、何哉、徒以名分尚存故也、至於季氏之於魯、田常之於齊、白公之於楚、智伯之於晉、其勢皆足以逐君而自爲、然而卒不敢者、豈其力不足而心不忍哉、乃畏奸名犯分、而天下共誅之也、今晉太夫暴蔑其君、剖分晉國、天子既不能討、又寵秩之、使列於諸侯、是區々之名分、復不能守、而并棄之也、先王之禮、於斯盡矣、或者以爲當是之時、周室微弱、三晉彊盛、雖欲勿許、其可得乎、是大不然、夫三晉雖强、苟不顧天下之誅、而犯義侵禮、則不請於天子、而自立矣、不請於天子、而自立、則爲悖逆之臣、天下苟有桓文之君、必奉禮義而征之、今請於天子、而天子許之、是受天子之命、而爲諸侯也、誰得而討之、故三晉之列於諸侯、非三晉之壞禮、乃天子自壞之也、嗚呼、君臣之禮既壞矣、則天下以智力相雄長、遂使聖賢之後、爲諸侯者、社稷無不泯絶、生民之類、糜滅幾盡、豈不哀哉。

筆を韓趙魏氏に起し、先づ第一に、名分の犯すべからざるを言ひ、王室の式微を憤慨し、且つ三晉を罪す、名分截然、其の言剴切、後世の讀者をして、悚然たらしめ、亂臣賊子をして慄然たらしむるの概なくんばあらず。公の史筆は、則ち是れ春秋の筆意なり。

孔子の名を正す、公の分を重んずる、聖賢の心期せずして其の符を合するものあり。公の學問の醇なる亦推すべし。吾人は、彼の大史冊にして開卷第一、如是の快文字あるを喜ぶなり、故に其の煩を厭はずして、之を茲に紹介せしなり。公の筆法にして、讜嚴なりと言ふ所以のもの、決して誣言にあらざるを知らん。

其十　公の著述及び其の家庭

公の學を好めることは、宛も飢渴の飲食に於けるが如く、其の財利紛

華に於ては、恰も悪臭を悪むが如し。故に公は暇あれば讀書の外、更に他に營設するものあらず、已に彼が如き大著述をなしたる上に、猶文集八十卷あり、他の著述二十種、五百餘卷ありと傳ふ、其の多々益々辯ずる、實に驚くべきにあらずや。

更に公の逸事を記するの零篇を按ずるに、

公の居室肅然として、圖書几に滿つ、圓木を以て警枕を作り、小睡すれば、則ち枕轉ず、而して覺むれば則ち書を讀む。獨樂園の文史、萬餘卷、晨夕披閲して、數十年を經しも、未だ嘗て手を觸れざるものゝ如し。

此の一節の如き、固より日常居室の一瑣事に過ぎずと雖も、公が謹嚴端正なる性格を知るに於て、十分の餘師あるを見るべきなり。

公は、端正なり、方直なり、謹嚴なり、故に其の家庭も端正に、方正に、謹嚴の儀則を脱せざるなり。一日其の子を敎ふるの言に曰く、

賈豎は貨貝を藏す、吾輩は書あるのみ、當に極めて寶惜を加ふべし、毎に汝が輩の兩指爪を以て撮起するを見る、是れ書を愛すること、貨貝だにも如かざるなりと。

嚴に書を珍重すべきことを戒むる此の如し。公が家庭に於ける、嚴格にして儀則に從へるもの、蓋し亦推して知るべきのみ。

公、其の兄伯康と友愛尤も篤し。伯康年將に八十ならんとす、公、之に奉ずること嚴父の如く、之を保すること、嬰兒の如くす、毎に食して、少頃あれば、則ち問うて曰く、飢うるなきを得んや。天少しく冷なる時は、則ち其の背を拊て曰く、衣薄きことなきを得んやと。

書に孝を曰はずや、友于兄弟、施乎有政と、公が友愛の至情は、眞に此の心なり。兄弟に友、此の心を擴充せんか、四海に友なるなり。天下に友なる

なり、斯民に友なるなり、公が眞宰相として、上下の信頼を受けたるも、一に是れ家庭の友愛を天下に及ぼしたるの結果に外ならざるなり、知らずや、天下の本は、國に在り、國の本は家にあり、家の本は身に在るを、

斯かる圓滿なる友愛の謨訓と、儀則ある家庭に教養馴致せられたる、其の子弟は如何、公の子司馬康は如何、蓬麻中に在るものは自然に直なり、吾人今公の家庭に於て之を謂はんとす。

司馬康、字は公休、文正公の子、明經に擧げられ、第に中る、神宗哲宗に事へて、位、司諫に至る、後に右諫議太夫を贈らる。

康、性端謹至孝なり、母の憂に居り、勺飲口に入らざるもの三日、杖ついて而して後に能く起つ、見るもの之を哀れむ、文正公、洛に居ること十五年、陝洛の間に往來す、士の學に公に從ふもの、退いて君と語る、未だ嘗て得るところあらずんばあらず、塗の人、其の容止を見る、識らずと雖も、其の司馬公の子たるを知るなり、公薨じて哀毀加ふるあり、喪を治むる、皆禮樂家法を用ゐ、敢て世俗の事をなさず。

瞬以て其の子に與ふるを得ず、瞽聘以て之を其の子に奪ふを得ず、其の子の賢不肖、或は是れ天に由るものなしとするも、賢不肖の分界は、抑亦之を家庭の如何に推理せざるを得ざるものありて存するなり。

故に孟軻子は曰へり、中や、不中を養ひ、材や、不材を養ふ、故に人、賢父兄あるを樂む、若し中や、不中を棄て、材や、不材を棄つ、則ち賢不肖の相去る、寸を以てする能はずと。

溫公の家庭は、上來の如く、其れ嚴格なり、而かも嚴格の中、友愛なる恩情は、實に團欒たる中に存するなり、嚴格は極端に嚴格なるべく、愛情も亦極端なるを要す、而して愛と嚴との融和は、自然に此の間に行はれて、直正無垢なる良家庭は、初めて形ち造らるゝなり、溫公の家庭は、實に善

く此の家庭を造りたるなり。此の間に薫陶せられ、教養せられたる、司馬康が、克く其の德を完成したる所以、また偶然にあらざるなり。其の端謹の性、至敎の賀、是れ一に家庭敎訓の恩賜ならざる可からず。殊に路人、一見して以て司馬君實の子たるを知るに至る底の器をなしたるは、優に其の父に愧ぢずと謂ふべきか、非乎。

讀者よ、讀者よ、漫に溫公の盛德大業を稱述するを止めよ。盛德大業は、其の因由する所のものなくんばあらず。公の家を齊ふるの一心は、則ち是れ公の天下を齊ふるの心なり。公の家庭の儀則を示すは、則ち是れ公の天下の儀則を示すなり。公の環堵肅然たるの中、起居整然たるは、則ち是れ公の朝廷にありて、端然笏を正たすの心なり。公の書帙を亂ださざるは、則ち是れ公の本朝に立ちて、庶績整頓の心なり。此の機微を知りて後、初めて大人を語るべき而已。

其十一　公は忠臣に非ず、良臣也

昔時魏徵の太宗を輔佐して其の股肱となるや、一日從容として、太宗に謂つて、曰く、願はくは、陛下、臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむることと勿れと。

太宗曰く、忠良異なるか。

魏徵曰く、皐夔稷契は、其の君を輔佐し、君臣共に尊榮を受く、所謂良臣なり。龍逢比干は、面折廷爭、身死し國亡ぶ、所謂忠臣なりと。太宗其の言を以て可となせり。

唐名相の輩出せし、前には房杜あり、後には姚崇あり、皆以て魏徵の所謂良臣たるを失はざるなり。

公は、是れ如何なる人ぞ。龍逢比干的の人にあらず、公をして若し其の

當時に生まれしめんか、公は、或は箕子を以て自ら居らんか、將た伊尹を以て自ら任ぜんか。

吾は信ず、公の心、天下にある以上は、敢て箕子の佯狂を以て、自ら屑しとなさゞるなり、必ず伊尹を以て自ら居らんとす。仁人の心、時に殘に勝ち暴を除くが爲めには、干戈を動かすも敢て辭せざる所なり、伊尹の心是れなり。

公幸にして、夏桀殷紂の時に生れず、又大甲の不明に遇はず、社稷其の主を易へ、衆に誓ひ、以て禡祭を行ふに至らざりしなり。

公の生涯に就きて、之を謂はんか、公は、良臣を以て、自ら居らんとなしたるなり、爾り、公の學問と性格とは、先天的に良臣たるの資を有せり。時に面折廷爭すと雖も、危言危行、以て其の君を諷諭せり、公が克く終始を全うしたるも、畢竟此の旨に外ならざるなり。

更に一歩を進めて少しく之を言ふ所あらんとす。公をして創業の局に當らしめんか、恐らくは、公或は、其の器にあらざるべきか。公は守成の人なり、創業と守成の難易、今更に之を言ふの要なし、亦創業の人、或は守成の人と云ふを以て、其の人物を輕輕輕重することの、甚だ誤れるの見解たるを信ぜんと欲す。

一家を建設したるものは、建設したるの功、初めて之を建設したるものに在り、之に入るもの、固より其の勞を多なりとなさゞるを得ず。是れ創業の主なり、創業の主、之を忽諸に付し去る可からざるは、當然なり。

然れども、其の室に入り、之が經營と、維持に任ずるは、寔に至難の事に屬す、如何に松茂竹苞、堅牢精密なる建築と雖も、時に破壞の虞なしとなさず、時に風雨の侵暴なしとなさず、之を維持して、其の建物を永遠に保護するは、所謂守成者なり、守成者の任も亦輕しとなさゞるなり。猶又守

成者は、其の創業者が構造せし建物をして、少なくとも、其の從來の規模を失はしめずして、之を改造せざる可からざる時機に到達するの已むを得ざるものあり。棟梁の任、工師の責に任ずるものにあらざるよりは、此の仕組と、此の機宜を解する能はざるなり。

彼の小工師、匠人の徒は、自分の技を殊更に衒はんとするの餘り、從來の建物にして、未だ風雨侵暴の虞なきの矢先に於て、早くも之を改造せんと試む、否、單に之を試むるのみならず、之を破壞せんとするなり。

彼は、直に祖先が創意に成れる構造を破壞し、更に己自身の設計になれるものを建築せんとす。之を建築せんとする企ての前には、一家一門の異議も敢て顧慮することなきなり、親戚妻子の苦情も、更に意に介することなきなり、家族の迷惑も寸毫關心する所なきなり、唯自己が名を好み、奇を衒ふの結果、强ひて改造を試みんとす、無理に破壞を斷行せんとす、祖先創意の建物、是に於てか、破壞せられ、其の斷礎を求めんと欲するも、亦得べからざるに至る。

國家政治の事も、亦頗る之と相似たり。

宋の神宗の時代に於ける、是れのみ、安石は是れのみ、惠卿は是れのみ。

蓋し岌々乎として寔に危うかりき。

然れども、大工師、大棟梁たる公は、克く此の間に處し、飽くまでも祖先の建物を維持せんことに力めたり。公が熱心なる維持は、遂に功を奏せり、安石は、倒れたり、惠卿は、中途にして棟梁に蹴砂をなせり。

公は、寔に良臣にして、守成の人なり。

其十二　公は明哲身を保つものなり

公は通鑑を編述し、秦漢の事を記述し、張良を傳述し、更に良の賛を作り、明哲保身を以て良を品題せり、寔に恰當なる品題なりと謂はざる可からざるなり。

漢時の三傑物は、張良なり、蕭何なり、韓信なり、此の三人は、各其の所長の點に於て、互に相異なる者ありとするも、此の三傑物が、相提挈して劉季を輔佐し、遂に劉氏をして天下を取らしめたるに於ては、更に其の功の短長する所を見ず、此の三傑物は、同功一體の人と謂はざる可からず。

功は同じ、其の績は如何、其の始は如何、其の終は如何。詩に、克有始、靡克有終と言へり、三人の者、其の結果は、相同じからず。

韓信は、道を知るの士にあらず、恨を長樂宮に呑み、婦女子に欺かれて死す、固より其の所、更に論ずるなきのみ。

蕭何は、其の品、韓信に比して、大に逕庭する所のものあるを見る、然れども、其の終は如何、遂に械繫の辱を受けたり。

獨り張良は如何。是れ此の子、其の品、更に高く、更に一頭地を拔くものあるなり。

彼が、奇謀百出、項羽を劫制せし謀に至りては、之を言ふの必要なし。彼は、事平らぐの後、如何なる態度に出て、以て能く其の功名を維持し、且つ終始せしか、是れ聊か研究せざるを得ざるなり。

彼は、事平らぐの後、高帝、彼を封ずるに、齊の三萬戸を以てせんとせり。然るに彼は、更に辭して受けざりき。曰く。

臣、本と帝と留に遇ふ、是れ天の臣を以て陛下に與ふる也。臣、留に封ぜらるれば足る矣、赤松子に從うて遊ばん耳と。

齊封三萬捨如塵とは、是れ著者が嘗て張良を詠ぜし、詩中の句也。其の帝と留に遇うたるを言ひ、且つ天の臣を以て陛下に與ふるを言ふ。自負

の言、自然に其の性格を見はせり。更に功成り、赤松子に從うて遊ばんとす。高標品性、東西漢を通じて稀に見る所のものならずんばあらず。故に彼は、其の意志の如く、尤も安樂に、尤も平和に、尤も愉快に終りたり。明哲保身の贊、豈的確ならずとせんや。

公が張良を贊したるの語は、單に張良を贊したるにはあらずして是れ自然に、公の性情が發露せられたるものならずんばあらず。

公が一時、閑散なる官に身を退けられ、嘉遯无悶、編述の事に從ひたるも明哲保身的性情の結果なりと謂はざる可らず。是れ多年公が學問修養の上より來れるもの、一朝一夕の故、能く茲に至れりと謂ふ可らざるなり。

五代の馮導の如き、巧に亂離の間に處し、功名に飽き、優游以て禍を免れたるが如き、後漢の胡廣が、天下の中庸と言ふを以て、嫌疑の間に介立して、克く終始したるが如き、以て此の選に入るべきものか。曰く。

是れ似而非者ならざる可からず、紫は朱を奪ひ、鄭聲は、雅樂を亂る、鄉愿は、由來德の賊たるを免れず。馮導は、苟容迎合を以て當時に媚事し、功名富貴に惓々たるの徒輩のみ。胡廣は、圭角なきを以て、唯一の本尊とし、世と俯仰浮沈して此の名を博取せしものなり。眞に名教の罪人にして、君子の最も惡む所也。

動もすると、後世利口怪譎の徒、名を明哲保身に託し、不着不離の間巧に富貴を籠蓋し、自己の安全を計らんとするものあり、此等の徒は、朝にあらんか、馮導の故智を襲はんとするものなり、野にあらんか、胡廣の故態に、倣はんとするものなり、進退去就、更に名分の截然たるものあらず、聖人之を惡めり。

君子の進退は、正々堂々たるものなくんばあらず、道義に由るものな

かる可らず、進んで施爲する能はず、退いて優游する能はざるものは、是れ一日も富貴を忘るゝ能はざるもの、口に浮雲の富を嘲けれども、手に浮雲の富を握まんとせり。口に松喬の相羊を談ずれども、目は紫綬の榮にあこがれ、耳は鶴書の駕に驚かされ、心は魏闕の中に馳せ、身は常に丹墀の邊にウロックの醜を演ぜずんばあらず、此等の徒、豈明哲保身を語るに足らんや。

溫公は、四聖に歷事し、後散官に在りて、編述に從へり。公の心の天下にあるは、更に其の進退去就に關して、敢て加損する所のものあらざるなり、明哲保身の事、公の如き性格を有せるの人にして、初めて之を言ふべきのみ、初めて之を行ふべきのみ。曲世末學の徒夢想だにも及ぶ可からざるなり。吾人は此の徒の日に多きを加ふるものあるを慨嘆せずんばあらず。此等の徒、溫公の史に對し、溫公の靈に對し、當に愧死すべきなり

其十三　公の詩文と其の性靈

詩文は、其の人の性靈なり、其の人の寫眞なり。其の詩を誦し、其の文を讀まんには、直に其の人を想見するに足る、其の風采を懷望せしむ。性靈高尚ならざるの人は、詩とし、文として、之を諷誦するの價値あるなし。

關雎麟趾の篇は、諷誦の間、如何に一唱三嘆の妙味あらしむることよ。是れ王化の自る所、詩人性情の靈活にして且つ其の中正を得たるの結果ならずんばあらず。

楚辭は如何、其の言時に、佶屈傍麗に失するの嫌なきにはあらざるも、其の怨刺の微、忠厚の心、其の旨義、敢て三百篇と相悖らざるものあり、太史公司馬遷が、之を品題し、國風は樂んで淫せず、小雅は刺りて怨みず、離騷の如きは、之を兼ねたりと謂つべしとの言は、誠に千古動すべからざ

るの鐵葉と謂ふべき也。

大風の歌は如何。四言の詩は如何。大風は得意を示せり、四言は、忠正を見るに足れり。蘇李應答の辭は其の友生に於ける眞情を發露して餘裕あるを見る也。

淵明は如何、字々句々、其の恬澹なる性情を寫し得て、其の詩を誦するもの、勢利名聞共に忘するこの概なくんばあらず。

六朝の辭は如何。辭令餘りありて、氣魄の之に伴ふものなく、故に浮泛にして反復諷誦するの價値あるなし其の作者も大抵無慮、浮泛なり、輕佻なり、六朝の輩は、辭令の人にして、眞個詩人の神髓を忘却せり、遺失せり是れ前人に及ばざる所以也、

唐朝は如何、余更に茲に他人を云々するの餘地を有せず。李杜に就きて之を謂はんか。

李は、豪放也、放曠也、快活也、杜は、忠厚也、怨刺也、沈鬱也、李の豪放と放曠快活とは、奔逸の餘、爲めに風雅の外に馳するものなきにあらず、杜の忠厚と怨刺沈鬱とは、杜が平生自ら稷契を以て居るの見地よりして、終始敢て詭經の旨意を失ふものあらざるなり。

李は、詩中に於て、李の性格を見はせり、杜は詩中に於て、杜の性格を見はせり、兩者共に、性靈の反射にして、人格の寫眞ならざる可からず、兩者共に風壇の一偉人なり。

輕佻の輩、漫に、唐代風壇に於ける、二偉人を軒輊するを止めよ、批議するを止めよ、蚍蜉撼大樹の譏を免れざるべし。

齊桓晉文は、天子を挾みて諸侯に號令せり、諸侯服從せざらんと欲すと雖も得ざるなり。此の言を移して以て李杜を評せり。

李杜を挾みて詩を談ぜんか、宛も齊桓晉文が、天子を挾みて、諸侯に號

令すると同じと、寔に然り、寔に然り、李杜の前には、詩人顔色なし。

宋詩は如何、宋代の詩は寧ろ辭と謂はんよりは、理なり、是れ學問性理の結果ならずんばあらず、今其の一二を擧げんか。

土牀煙足紬衾煖、瓦釜泉甘豆粥新、萬事不求溫飽外、漫然清世一閑人。

或は又。

小鼎大癡螢捕蟬、有餘不足變怜蛇、退食歸來北窓夢、一江風月趁漁船。

の如き、數へ來たれば、幾んど枚擧に遑あらざらんとす。

更に溫公の詩を紹介せんか。

公が初夏の詩に謂へり。

四月清和雨乍晴、南山當戸轉分明、更無柳絮因風起、惟有葵花向日傾。

公は、文詞の人にあらざるなり、故に吾人は、公の詩の多くを紹介せんとするの煩を避けんと欲す、一管以て豹を知るに足る、此を以て公の全體を推す、多くの餘師を有するものなくんばあらず。

此の二十八字は、明かに公の性格を發露せり、公の忠厚を發見せり、其の結句に於て推有葵花向日傾を謂ふ、是れ公が一日も其の君を忘れざるの懷抱、言外に躍如たるものあり、一讀三嘆、益々公の性靈を欽景せざるを得ざるなり。

蓋し公、此の時熙寧間に於て、王安石と事を論じて合はず、歸りて活に居り、此の詩を作る、蘊蓄醇粹の中、自然に其の微意を發露し、更に怨對するものあらず、詩人忠厚の意、復た敢て間然する所なし。

范淳夫、評して曰く。

公恭儉勤謹、天性に出づ、而して澤、天下に被むる之を內にしては見童之を外にしては蠻夷戎狄、其の德を欽し、其の名に服せざるはなし、惟至誠無欲なるが故なり、今此の詩の末句を觀て、公の至誠を見

るべしと。

適評的確、寔に吾人の意を得たるものならずんばあらず。性靈の寫眞は眞に吾人を欺かざるなり。

多くの詩を誦讀するの要なし、多くの詩を摘錄するの煩たるを知る。讀者よ、讀者よ、一隅を擧ぐれば、應に三隅を反すべし。此の如くにして、初めて共に溫公を語るべきなり。

文乎文乎。

公の文は、世道に在り、經濟にあり、餘力發して文となる、公の文を知らんと欲するものは之を公の文集に求めんよりは、之を公が通鑑の史論に求むるの益あるに如かざるなり、昆山の片玉、滄海の遺珠、之を拾集するは其の人の根氣と、力量如何とに在り、敢て其の拾集を禁ずる者にはあらず。

其十四　公の生活は最も淡泊なり

食前方丈、其の妻妾に誇るもの、是れ君子の心ならんか否寧ろ之を愧づ。

故に公の生活は、極めて淡泊なり。

公曾て曰く、

凡爲家長、必謹守禮法、以御群子弟及家衆、分之以職、授之以事、而責其成功、制財用之節、量入以爲出、稱家之有無、以給上下之衣食及吉凶之費、皆有品節、而莫不均一、裁省冗費、禁止奢華、常須稍存贏餘、以備不虞。

と此言に由りて之を推すに、家政法あり、敢て華を競はざる、亦以て知るべきのみ。

父又言へり。

吾家本寒族、世以清白相承、吾性不喜華靡、自爲乳兒時長者加以金銀華美之服輒羞赧棄去之、年二十恭科名、聞喜宴、獨不戴花、同年曰、君賜不可違也、乃簪一花、平生衣取蔽寒、食取充腹、亦不敢服垢弊、以矯俗干名、但順吾性而已、と、

其の身已に寥廓の上に在り、猶敢て寒素の時を忘れず、其の淡泊と其の無欲とは、天性なり、彼の膏粱美酒、徒に腸を腐し、毫も氣魄なきの徒は公の寒素に處するに對して、まさに愧死することなからんと欲すとも得ざるなり。

呂献公の行事、亦た頗る公と相似たり。

呂献公自少講學、即以治心養性爲本、寡嗜慾、薄滋味、無疾言遽色、無窘步、無惰容、凡嬉笑俚近之語、未嘗出諸口、於世利紛華、聲伎遊宴、以至於博奕奇玩、淡然無所好、

と、大偉人の修養は、共に其の軌を一にせり。

胡文定公の言に曰く。

人須是一切世味淡薄方好、不要有富貴相、孟子謂、堂高數仞、食前方丈侍妾數百人、我得志不爲、學者須先除去此等、常自激昂、便不到得墮落、

と、由來前修賢哲の養ふ所、淡泊寧靜を以て、修養の根柢となさゝるは莫し、此の根柢ありて後、造詣する所深域に達すべし、性靈を陶冶するも、之に出でず、人格を高尚にするも、之を措いて他に術なし、古人を尚友するの士、たゞ意を致して可なり

其十五　司馬溫公と蘇東坡

吾人は、宋代の偉人として司馬溫公を推す、司馬溫公を推すと同時に、宋代の一奇材として蘇東坡を推さゝるを得ざるなり。

晉に彼は、一奇材たるのみにあらざるなり。彼は慥に經世の士たり。彼が神宗に上りたる一大長篇の論策は、如何に其の抱負を見るに足るべきぞ。彼は群小に遮蔽せられ、胸中の經綸、一も施す所なく、空しく文詞に託して一生を行雲流水の如くに、送り了せしこそ、實に惜しむべきことなれ。彼東坡の初めて世に知られしは、實に歐陽公、之が先容をなせり。陽公の後輩を誘導し、後輩をして名をなさしめんことに力めたるは、汲々日も亦足らざるの概ありしなり。

歐陽公、嘗て東坡の文詞を讀み、其の奇拔峭絶、頗る古人の風あるを嘆賞して曰く、此の生、必ず一頭地を拔かん。今こそ、世人歐陽子の名を稱するなれ、今より三十年の後、天下亦歐陽の名を言ふものなからんと。

東坡の奇才、決して一生に埋沒せるものにあらず、後生眞に畏るべし。焉ぞ來者の今に如かざるを知らん。歐陽公の烱眼なる、早くも東坡の奇才俊絶を見拔きたり。三十年後、必ず名をなすを知る。彼が名をなすの時は、乃公已に老うるの時代ならざる可からず。其の烱眼已に多なり、殊に後進をして、十分に名をなすの餘地あるを得しめ、己隱退の微言を漏らすの虛心坦懷に至りては、深く東坡を知るものありとは言へ、歐公人の美をなし、人の名をなすに汲々たるの雅量あるにあらざるよりは、決して此の言をなすこと能はざるなり。

歐公と東坡に於けるの默契は、其の由來する所、固より之あり矣。故に東坡が京師に至り、禮部の試に應ずるや、恰も好し、當時の考官は、歐公と莫逆の友たる梅聖俞なりしなり。

梅聖俞と歐公、其の人格に於て、其の鑑識に於て、寔に願うてもなき好考官たるなり。此の上もなき好考官たるなり。東坡此の試に應ず、實に千歲の一事なりと謂はざる可からざるなり。

應試の後、東坡は果して第に中れり、而かも第二の好成績を以て、第に中れり、東坡の心事、其れ果して如何ぞや。

東坡は、勢利に淡なるの徒也、貨財に冷なるの士也、彼の欲する所は斗升の祿にあらざる也。彼は、天下に知己を得るを以て足れりとなす、彼は、向に歐公に知られ、更に梅聖俞に知られたり、彼の得意、其れ思ふべし。

彼の得意は、中第を以ての故にあらず、只二公の知を以てなり、故に彼は、梅公に書を寄せたり、其の寄せたる一節に曰く。

人苟くも以て富貴なる可らず、亦徒らに貧賤なる可からず、大賢あり、其の徒となるときは、亦以て相樂しむに足るなりと。

何ぞ其れ其の言の瀟脫にして、且つ淡泊なるや、此の言を以て、其の心を推すときは、彼の眼中、固より富貴なき也、名爵なき也、科擧なき也、彼は、科擧に應じたるにあらざるなり、彼は禮部の名に眩したるにあらざるなり、彼は歐陽公の人物に應じたるなり、彼は梅聖俞の人格に應じたるなり、二公に親炙せんとしたる也、彼が二公を欽慕し、二公に親炙せんとしたる壯心燃ゆるが如きの熱情は、ゆくりなくも、高科を得たる也、高科を得て、遂に二公に咫尺するを得たるなり、二公と共に其の道を樂むの幸處に際會せり、是を以て彼は得意なり、故に上書の中、彼は、三たび意を玆に致せり、彼は勢利に於て、寔に無邪氣なるものと謂はざる可からず。

彼は、勢利に無邪氣なり、故に其の文詞は、瀟洒脫塵の想あり、彼の文詞を讀むものは、彼と共に世外に亭々たるの感なくんばあらず。

彼は、文詞の中に竄るゝが如しと雖も、苟も事國家の休戚に係るものあるに於て、一枝の筆、三寸不律、奔放激越、大策を建て、賈生の治安策をも、顏色なからしむ。

此の如きの彼は、歐陽公の先容を以て、第一の知己を得、更に第二の知

己梅公を得たり。第二の知己を得たるのみならず、更に進んで第三の知己を得たる也。第三の知己とは果して誰ぞ、曰く司馬溫公也。

明道は端直自ら持せり。東坡は洒落を以て、奇材を以て、殆んど當世を罵倒せり。洛蜀黨爭の紛、固より免れざる所か。明道の有道にして、東坡の豪放を容る能はざる、明道の德に於て、損する所なしとなさゞるなり。

溫公は夙に、東坡を黨爭紛糾の中に知れり。其眼識、實に一頭地を拔けるものありと謂ふべし。彼を黨爭紛糾の中に知るが故に、曾て彼を諫議太夫に推薦せり。是れ深く東坡を知れるにあらざるよりは、爭てか之を謂はん。溫公を以て、東坡第三の知己となす、東坡必ず首肯する所あるを信ずるなり。

其の得ると、得ざるとは、抑亦時に之を命なりと謂はざる可からず。假令其思を蒙らざるも、已に己を推すもの、之を知己と謂はずして可なら

んか。東坡たるもの、已に溫公の心を諒とするは、今更に、之を反復說明するの寧ろ贅言たるを信ぜんと欲する也。

彼は爾く公の知遇を受けたるものあるなり。故に彼にして、富若し求むべくんば、公の爲めには、執鞭の士と雖も、亦之を辭せざるべし。故に彼は、內翰たる時、公の神道碑銘を作りて曰く

於皇上帝、子惠我民、孰堪顧天、惟聖與仁、聖子受命、如堯之初、神母詔之、匪函匪徐、聖心無心、孰左右之、民自擇相、我與授之、其相維何、太師溫公、公來自西、一馬二童、萬人環之、如渴赴泉、孰不見公、莫如我先、二聖忘己、惟公是式、公亦無我、惟民是度、民曰樂哉、旣相司馬、爾賈于途、我耕于野、是曰時哉、旣用君實、我後子先、時不可失、公如麟鳳、不鶩不搏、羽毛畢朝、雄狡率服、爲政一年、疾病半之、功則多矣、百年之思、知公于異、識公于微、匪公之思、神考是懷、天子萬年、四夷來同、薦于淸廟、神考之功。

と東坡を以て、公を銘す、公亦地下に瞑せん。東坡の公を銘する、亦其因由なしとなさゞる也。東坡神來の筆力は、公の功績を勒して餘あり。公の偉勳、公の功烈は、東坡の筆に依りて長く金石と共に不朽なるべきなり。

吾人は回を追ひ、篇を重ね、縷々論述したるの結果、竊かに思ふ、聊か宋代の偉人たる司馬溫公の風丰の一斑を讀者に紹介し得たり、と。而して猶最後に臨み一言せざる可からざる所のものあるなり。

天の偉人を生ずる、數ならず、暴人を生ずる、亦數ならざるなり。夏は禹を生ぜり、而して禹は亦接踵して出でず。夏は桀を生ぜり、而して桀は自滅の後、亦桀を生せず。殷は湯を生ぜり、而して中興の後、遂に生ず。秦政に次ぐに二世を以てし、漢高に受くるに、惠の暗弱を以てし、光武に次ぐに明帝を以てすると雖も、一世にして孝章の不武を以てせり。神堯李氏は、次ぐに世民を以てしたれども、孝膚の凡庸は、以て武氏の專横を防遏すること能はざるなり。其の他、歷代の史を按じ來れば、明に次ぐに暗を以てし、强に次ぐに弱を以てし、暗出でて、明之に代り、弱生れて、强亦之に繼ぎ、一仆一起、興亡盛衰、新陳代謝、恰も走馬燈の觀あるは、是れ畢竟造化の配劑か、將又故意か、自然か、眞に之を測知するに苦しまずんばあらず。然りと雖も、偉人の出づる數ならず、暴人の出づる亦數ならず、國家百年の後、偉人あり、亦百年の後、暴人ありとすれば、其の間偉人と暴人との調和は、自然に行はれ、偉暴二者の對照に由りて、爲めに國家の體面も革新せらるゝものなきにあらず、殊に支那の如き、幾度となく、革命の歷史を有せる國柄にありては、殊に然りとなさざるを得ざる也。

五百年にして王者興るとは、是れ歷數を推理して以て、王者を渴仰するの愛世的言辭ならざる可からず。猶語を易へて言へば、一方世をはかなみたる一時の愚痴的言辭ならざる可からず、王者を渴仰するは、是れ

玉者の興らざるを歎息すると同時に、王者の興ざらるを證據立つるの言辭なりと謂はざる可からざるなり。

後進後輩が、偉人を想慕し、偉人を渇仰するは、即ち是れ當代に、偉人なきを證據立てたるなり。若し當代に偉人あらんか、何を苦んでか、隔世の偉人を渇仰せん、欽慕せん、嘆々乎として、古の人、古の人と絶呼する底の狂者の胡態に倣ふの必要を見ざる也。

猶大なる偉人の現出は、爲めに、より以前の偉人を光輝なからしむるに至らんとす。より以前の偉人にして、依然として以前の光輝を放つものありとせん乎、是れ明かに、事實は當時に於て、より以前の偉人よりも、優なる偉人を生ぜざること、を證據立てたる也。否、其より猶下れるものをも生ぜざるを白狀するものならずんばあらず。

温公の後、更に大なる温公を生ぜんか、温公の歴史は、遺憾ながらも、公が光輝ある歴史の幾分を埋沒減殺せらるゝものあるのみならず、後進後輩は、向者の温公に捧げたる敬意を割きて、後の大なる温公に向つて、叩頭稽首せんことは、即ち是れ人情の自然なり。否、進脩の順序なり。

然るに温公は、依然たる温公なり。温公の光輝は、萬古を通じて依然たる温公なりとすれば、温公以後、未だ大なる後の温公に接するの機會と幸運に遭逢せずと云ふも、強ちに之を誣辭と謂ふ可からざるなり。

後人は、大久保甲東を追想し、木戸松菊を欽慕し、西郷南洲を景仰す。此の三偉人を追想し、欽慕し、景仰するは、是亦明かに、三偉人が、飄然黄鶴に乗じて、白玉樓中の仙となりたるの後、更に三偉人の再現出を見ざるの實相なりと謂はざる可からず。

時窮すれば、則ち通ず、否らざれば亦泰あり。循環極まりなきは是即ち天運自然の數なりと謂はざる可からず。窮否と偉人とは、時に相離る

可からざるの關係を有するものならざる可からず。時の窮否は、偉人の崛起を促せるの時代なり、時代の催促は、偉人必ず出てざる可からざるの數を有す。嗚呼、今時は、窮か、通か、泰か、否か、吾人は之を言ふに忍びず、唯拱手以て天の一方を睥睨するのみ。

吾人、不幸にして當代の偉人に接せず、依然嚶々、古人を連呼せざるを得ず。古人を連呼するの憤悱は、宋代を聯想せり。宋代を聯想せる關係は、遂に司馬溫公を連呼せり。溫公を連呼するの結果は、迸發して一篇の文字となれり。庸陋の筆、豈に公の萬一を寫し得ると謂はんや。課餘一讀の下、或は時に靑衿諸子の警枕たるに價するものあらんか、是れ吾人望外の幸福なり。

司馬溫公言行錄終

明治四十一年五月　日印刷
明治四十一年五月　日發行

司馬溫公言行錄
定價金貳拾五錢

著作者　北畠竹之助
發行者　山縣文夫　東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地
印刷者　靑木弘　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所　東京巢鴨郵便區上駒込山縣邸內　電話下谷四百三十八番
內外出版協會
（振替貯金口座番號三五五）

偉人研究

（第一編）リンコーン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二編）トルストイ言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三編）ガーフィールド言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第四編）フランクリン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第五編）グラッドストン言行錄　定價金廿五錢　郵稅二錢
（第六編）改版　二宮尊德言行錄　定價金廿五錢　郵稅四錢
（第七編）ローズヴェルト言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第八編）ワシントン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第九編）山鹿素行言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十編）中江藤樹言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢

版元　東京巢鴨郵便區染井山縣邸內
（振替貯金口座番號第三五五九）
內外出版協會

偉人研究

（第十一編）貝原益軒言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十二編）ルーテル言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十三編）大石良雄言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十四編）聖德太子言行錄　定價金廿五錢　郵稅四錢
（第十五編）吉田松陰言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十六編）渡邊崋山言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十七編）熊澤蕃山言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第十八編）新井白石言行錄　定價金四拾錢　郵稅四錢
（第十九編）ナポレオン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十編）ネルソン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢

版元　東京巢鴨郵便區染井山縣邸內
（振替貯金口座番號第三五五九）
內外出版協會

偉人研究

（第二十一編）ウェリントン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十二編）日蓮上人言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十三編）ペスタロッチ言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十四編）ゴルドン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十五編）リヴィングストン言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十六編）伊藤仁齋言行錄　定價金廿五錢　郵稅四錢
（第二十七編）道元禪師言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十八編）クロムウェル言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第二十九編）諸葛孔明言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十編）親鸞聖人言行錄　定價金廿五錢　郵稅四錢

版元　東京振替貯金口座　鶴巻郵便區第三百五十五番　染井山縣邸內　內外出版協會

偉人研究

（第三十一編）弘法大師言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十二編）德川光圀言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十三編）フレーベル言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十四編）林子平言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十五編）佐久間象山言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十六編）司馬溫公言行錄　定價金廿五錢　郵稅四錢
（第三十七編）法然上人言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十八編）マホメット言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第三十九編）西鄕隆盛言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢
（第四十編）ガリバルヂ言行錄　定價金參拾錢　郵稅四錢

版元　東京振替貯金口座　鶴巻郵便區第三百五十五番　染井山縣邸內　內外出版協會

東京外國語學校教授 片山寛著

英語の手紙

《訂正第七版＊定價金二拾五錢＊郵税四錢》

『商業界』今日の英語の智識は單に英書を解するのみを以て足れりとすべきことに習熟するの必要なるや論なにあらず。本書は此目的に資せんが爲めに編まれたるものにして、始めに一般の注意手紙の認め方封筒の記し方を說き次に普通文と實務上の手紙とに別ちて各數十章の作例を擧げたれば、一般人士は固より實業家にとりても好箇の參考書たるべし。

『太平洋』始めに一般の注意手紙の認め方封筒の記し方などを簡明に記し次いで普通文及び實務上の手紙各數十篇の文例を載せたり就中實務上の手紙は最も實用に適するもの多く、大に實業家の參考となるべし。近來此の如き書が漸次實用的となれるは喜ばしきことなり。

『早稲田學報』凡そ英文に熟達せんと欲せば第一弘く英文を讀み第二多く英文を草せざるべからず。本書は書翰文の類例數十種を示したるものにして社會百般の事項を網羅するは一小册子の能くする所にあらざれども學生にして能く多讀多作の二要件を實行し更に此小册子を以て机上の友となせば庶幾くは英文を以て其意志を通ずるを得ん乎。著者は早稲田大學並びに外國語學校の教授たるホースエヴル氏なり。

『英文新誌』片山寛君は英語英文に頗る明るい勤學の士であつて曩には『英語發音學』の好著がある。此度の『英語の手紙』は平易簡明に社交用、商業用等の手紙の書き振りを示されたるもので、初學生の爲めに有益なる著述である。

『英學生』英文書簡に關する書は既に數多く出版せられたれど、此書ほど簡にして要を得たるものはない。始めに英文手紙の書き方を敎へ、次に數多の文例を掲げてあるが、其文例はいづれも實用に適するもので、日本文が對照して且つ註釋も添へてあれば初學者にもよく分る。

版元 東京振替貯金口座第三百五十五番 郵便區染井 電話五十五番 內外出版協會

エ 2P 36

近代傑作集 第一編

ツルゲネフ作　御馬相風譯

夜前のそ

定價金七十錢　郵稅六錢

明治文壇の一新事業、近代傑作集の刊行!!!

本編は露西亞文學の明星イヴン・ツルゲネーフの傑作『オン・デ・イヴ』を譯出せるものなり。ツルゲネーフは我が新興文學の促成に絶大の影響を與へし人、其作品の我れに味讀せらるゝ素より久しと雖も、而も尙ほ彼が長篇小說の移植を企て、そが全風趣を探るに自由ならしめたるは尠し、『その前夜』の出づる、眞に偶然にあらざるなり。想ふに『オン・ジ・イヴ』は、ツルゲネーフが露國一代の風潮に省みしもの、一國の青年に精神的革命の氣運を導かんとして試みし一篇作中の裏面に在つては鬱熱して休むなき國民覺醒の精神が千波を揚げて北歐の天地に轟き、空は乃ち革命に東明せんとす、その夜明前こそ、我が『オン・ジ・イヴ』の暗語なり。かくの如く革命の火蓋に手を着けし作者は『オン・ジ・イヴ』に於て又慥かに藝術の最妙手たるを得たり、此篇の如く圓熟無縫の姿にあるもの彼が作中にあるなく、此篇の如く女性の描寫に巧妙なるもの近代小說中にあるなし、げに自然派作中の代表作と推稱せらるゝも理なり。譯者御風氏、詩人として作家として夙に我が新藝苑に溯歩す、今其譯筆を行るに清新の滋味に富み、原作の面影を移すに自由なり、一讀直に藝術の新泉に浴するを得べし。此一本を汎く新興文學に組する諸子に薦むると共に、天下の讀書子が、來つて醒めたる女エレンの戀に同感せんことを望む。

版元　東京巢鴨郵便區染井第三百五十五番地　振替貯金口座　内外出版協會
山梨縣東山梨郡内藤村

[redacted]

95
45

310002-000-2

95-45

司馬温公言行録

北畠　竹之助／編著

M41

ACL-0000